



始





特205
706



心の掃除

世を語る



文學博士 前田 慧雲 著
修養會々長 加藤 咄堂



垢也除先

先

牛井



Handwritten text at the top of the right page, possibly a name or title.

Large, faint characters, likely the main title or a large character, possibly '福' (Fortune).

Large, faint characters, likely the main title or a large character, possibly '壽' (Longevity).

Large, faint characters, likely the main title or a large character, possibly '長' (Long).

Large, faint characters, likely the main title or a large character, possibly '壽' (Longevity).

Vertical calligraphy on the right side of the top-left photo: 右壽子細幸 同幸子進上



Vertical calligraphy in the center of the top-left photo: 右壽子細幸 命書

Vertical calligraphy on the left side of the top-left photo: 乙未秋子細幸 命書 右壽子細幸 命書



Vertical calligraphy on the left side of the bottom photo: 右壽子細幸

短序

今や我國は、外、東亞の安定を双肩に擔ひ、又は赤化の防拒に、友邦獨伊と共に、鼎の一脚の重責に任じ、内、昭和維新の達成に赫々たる國史中を前進しつゝあり、この秋、敢てこの秋にあたり

本書を世に送るの、幸を滿喫し、且は其責の一層の重大さを痛感しつゝ、拙筆を呵して稿を爲す、憾もとより尠しとせず宜しく讀者の明察を以て補はれん事を希ふ。

而して本書に於ては、所謂四角張つた議論や、深奥な哲學を論ぜず、専ら吾人人類共通の弱點にして、日常最も誤り易い事々に就て、或は先賢の遺訓に顧み、或は筆者等の體驗や考察に基いて記述し、全社會大衆に懇ふる所期の小書なり。

心の掃除 處世を語る 目次

第一篇

文學博士 前田 慧 雲 著

第一章 眞の改造に覺めよ

- 一 生活難絶叫の本源……………一
- 二 眞の改造に覺めよ……………三
- 三 内容ある生命ある改造……………四

第二章 眞の安全生活

- 一 自己の脳中も危険……………七
 - 二 勿體ないと思へ……………八
 - 三 未進んで未退く……………九
- 目次……………一

四 勿體ないとは如何……………九

五 何事も有り難い……………一一

六 氣の毒に思へ……………一三

七 安全の生活は是れ……………一四

八 絶対に歸依せよ……………一五

第三章 労働問題の解決の鍵

一 能率増進の根源……………一七

二 労働問題の解決……………一八

三 生活改善と宗教……………一九

四 眞の改善と信念……………二〇

第四章 人生の第一義

一 傳染病と修養……………二二

二 自他の珍寶は是れ……………二四

三 子弟への教訓……………二六

第五章 中正と反省

一 昭和時代の吾等……………二七

二 世界的と中正の心願……………二七

三 反省こそ大切……………二八

四 節操と反省……………二九

第六章 忠言を感謝せよ

一 忠言を容れよ……………三〇

二 我を捨てよ……………三一

三 恥しく思へ……………三三

第七章 世界思潮と忠君愛國

- 一 混亂の物心兩界……………三五
- 二 自己中心主義……………三六
- 三 正義公道の國是……………三六
- 四 信仰の基調は佛教……………三七
- 五 皇室は即ち國家……………三八
- 六 佛教と忠君愛國……………三九

第八章 國民の自信力

- 一 自信力が最も貴い……………四〇
- 二 日本の將來と自信力……………四二

第九章 人間と禮儀

- 一 今の人と禮儀廉恥……………四四
- 二 禮儀は誠敬の實現……………四五

- 三 禮儀は心の城廓……………四五
- 四 禮儀の修養法如何……………四七

第一〇章 書は心學なり

- 一 書は極めて大切なり……………四八
- 二 丹田に力を入れよ……………四九
- 三 書は人格の表現也……………四九
- 四 書道練達法……………五〇
- 五 大に習得したし……………五一

第十一章 釋迦の男女觀

- 一 釋迦の世界觀男女觀……………五二
- 二 男女の差別は取扱上の問題……………五二
- 三 冷かに理性の判斷を仰げ……………五三

四 硬教育の緊要……………五十四

第一二章 夫婦和合の結婚

一 信仰と家庭……………五十五

二 物質より精神こそ……………五十七

三 親子夫婦は未來まで……………五十九

第一三章 松平樂翁公の女訓

一 女は柔かにして順へよ……………六〇

二 浅い學問を鼻にかけるな……………六一

三 柔順にも種々ある……………六二

四 萬づ卑しからず物靜に……………六三

第一四章 賢婦楫取希子

一 希子さんと松陰先生……………六四

二 毎夜食物を運ぶ……………六五

三 何事にも騒がず……………六六

四 惡風俗教化に努力す……………六六

五 芽出たき往生……………六七

六 其の遺言狀……………六八

七 遺言の要旨……………七五

第一五章 心の掃除法

一 先帝崩御と心の掃除……………七六

二 乃木將軍殉死の影響……………七七

三 明治天皇御製歌留多……………七八

四 至誠を傳ふる書……………七八

五 學ぶ所何事ぞ……………七八

第二篇

加藤咄堂居士述

第一章 人生の謎の解

- 一 人生の三大疑問……………八一
- 二 死後の世界は如何……………八一
- 三 死より義務を盡せ……………八二
- 四 人生は恰も芝居の如し……………八四
- 五 職業は何れも平等也……………八五
- 六 社会的理解……………八六
- 七 自分一生のみにあらず……………八七
- 八 理想は眞善美の實現……………八八
- 九 樂は苦の種、苦は樂の種……………九〇

- 一〇 人の義務とは何ぞ……………九二
- 一一 所謂運命の開拓法……………九三
- 一二 名優中村仲藏の話……………九五
- 一三 豊臣秀吉の成功……………九五
- 一四 眞我の發現を要す……………九六

第二章 智慧と慈愛と勇氣

- 一 智慧と慈愛と勇氣……………九八
- 二 智慧には學問を要す……………九八
- 三 學問を惡用する勿れ……………一〇〇
- 四 感情の力と家事……………一〇一
- 五 財欲……………一〇二
- 六 名譽欲……………一〇三

七 他の三つの欲……………一〇四

八 仁愛同情……………一〇四

九 勇氣もて感情を制せよ……………一〇五

第三章 言葉に就いて

一 言行一致を要す……………一〇六

二 言葉の歴史の一つ……………一〇六

三 物は言ひ様に依る……………一〇七

四 分り易く品よかれ……………一〇八

五 正確なるを要す……………一〇九

六 一に不忘語戒なり……………一一〇

七 二に不兩舌戒なり……………一一〇

八 三に不惡口戒なり……………一一一

九 四に不綺語戒なり……………一一一

一〇 言葉は愛語こそ……………一一二

第四章 菜根譚の修養

一 惡中の善と善中の惡……………一一四

二 逆境も順に受ける……………一一五

三 成功者と失敗者……………一一六

第五章 國民的信念

一 現代人の迷信は是れ……………一二七

二 共同の精神と力の充實……………一二九

三 大正の日本人たる信念……………一二一

四 自主的選擇の妙味……………一二三

五 佛敎の影響と國民性……………一二五

六 皇室、理と情との合一……………一二七

七 國家の組織は扇の如し……………一二九

八 自覺と感恩と協同……………一三一

第六章 現時の問題と精神的教養

一 現時の問題は是れ……………一三二

二 物質問題と精神問題……………一三四

三 人心に觸れよ……………一三五

四 義務の自覺……………一三七

五 建設的精神……………一三八

第七章 思想問題と生活問題

一 國民的の生活……………一四〇

二 我が國家の特色……………一四三

三 現代國家の二大要求……………一五〇

四 共同生活と共同責任……………一五三

五 徹底的精神……………一五七

六 獨立生活の提唱……………一六〇

七 勤儉の氣風……………一六四

八 自覺ある協力……………一六五

第八章 實力養成の根本義

一 緒言……………一六九

二 先覺者の態度……………一七〇

三 如何なる状態ぞ……………一七三

四 世界の覺醒と日本……………一八〇

五 民力涵養の諸問題……………一八四

六 國民的自覺……………一八九

六 國民的信念……………一九五

八 健全なる國 觀念……………一九七

九 民本的政治……………一九九

一〇 政治眼を養へ……………二〇四

第九章 維摩經と坐禪の眞義

一 維摩居士……………二一四

二 小乗と大乘……………二一六

三 維摩と舍利弗……………二二一

四 禪は坐のみにあらず……………二二三

五 坐禪の意義……………二二七

六 凡夫の事を現せよ……………二二九

第十章 大聖釋迦の女訓

一 序説……………二三七

二 女人の法……………二三九

三 三障十惡……………二四〇

四 五婦……………二四一

五 五善三惡……………二四五

六 玉耶懺悔……………二四八

七 成佛の道……………二五〇

八 善惡應報……………二五三

九 結勸……………二五七

第十一章 今後の婦人と智情の調和

- 一 男女の腕力と其の優劣……………二五八
- 二 掠奪結婚から賣買結婚へ……………二六〇
- 三 結婚奇風「火跨ぎ」と「水祝ひ」……………二六一
- 四 結婚奇風「石打」と「錦木」……………二六二
- 五 夫も働かねば食へぬ世の中……………二六五
- 六 今後の婦人職業問題……………二六六
- 七 強情の情と同情の情……………二六八
- 八 情理の調和と圓滿なる人生……………二七〇

目次終

心の掃除 處世を語る

文學博士 前田慧雲述

前篇

第一章 眞の改造に覺めよ

一 生活難絶叫の本源

近來世の中が物質的になり過ぎて、何でも金だ利益だ、食へるとか食へぬとか云ふ問題をうるさい程言つて、何でも騒ぎ立てる。それは騒ぐのが悪いと云ふのではない矢鱈に騒がせる、不健全な源を塞がせたいのである。一面から云ふと、自覺なき富豪、自省なき権力家の跋扈が、或一面に於て之を誘致したとも云へる。其等に對する反抗の聲が、食へぬ食へぬと無闇に叫び出したのであらう。自覺なき富豪、自省なき

第一章 眞の生活に覺めよ

権力家と云ふものは、即ち物質主義の権化である。固体である。それに反抗して、又物質的な醜い聲が叫ばれるのは、理の當然かも知れない。毒は毒を以て制しると云ふ意味で、かうした醜い聲が叫び出されたのかも知れぬ。事實、無自覚な無反省な富豪や権勢家は、寧ろ毒を以て、彼等の尻尾を抑へない限り、つまり或意味で強制しない限り、決して彼等は貪婪や放恣を止めないのである。更に言を換ふれば、痛い所を抑へない限り、彼等は何處までも、づうくしく、自分一個、自分一家の利慾をのみ押し進めて止まないものである。而も現代社會の組織は、或程度の地位を得た其等の者のみに都合の好いやうになつて居るので、一旦權勢を得、一旦幾千の富を擡んだ者は、益々榮達するばかりである。だから世界の人間生きとし生ける者が、皆ごうにかして富の端緒を得よう、權勢を得るきつかけを捉へようとするこのみに、血眼になつてしまつたのである。それ以外には、人生の意義なしと、皆が皆惡悟してしまつたのである。歎しい世の中ではないか。

二 眞の改造に覺めよ

これで近來、頻に改造問題が叫ばれ、何物をも改造せねば止まぬと云ふ勢で、中には極端な思想までが、吾等の耳目を刺戟するやうになつた。併し、今日叫ばれて居る改造は、唯單に形式的に囚はれて、根柢ある内容ある改造を意味して居ない。單に毒に對するに毒を以てするに過ぎない。言ひ換へれば、猛獸の急所を巧く抑へて、猛獸が聊か手を拱いて居るに乗じて、其の隙に無智な弱者連が、夫等の富豪に眞似て、自分等の利慾を恣にしようとするに過ぎない。是れでは少しも、改造ではない。即ち精神界の根柢に觸れた改造ではない。精神界の根柢に觸れないで、何の改造があり得よう。唯食へない食へないと云ふ叫び聲で、富豪や權勢家を脅しつけて居るだけではないか。眞の改造は、さうした所にはない。即ち現代の人心は、餘りに物質慾に墮して居る。物質慾の平等が望まれるれば、それが改造だと思ひ入つて居る。餘り墮落しようが、甚いではないか。だから徒に食へない食へないの聲が、不謹慎に連發され

るのである。本當の改造は、そんな生温いことではいけない。人間は食ふのが目的でない。併し、食はずには居られない。で、本當に食へないならば、その食へない根本の問題を究めて、それに向つて本氣に改造を企てねばならぬ。たゞ食へない食へないと云つて、乞食ではあるまいし、食ふことを第一に考へ、それにばかり囚はれて居る人間は、一體何の爲めに生れて來たかを、一度も考へたことのない輩ではあるまいか。眞の改造は、自分の精神の改革でなければならぬ。無自覺な、無反省な、富豪權勢家に迫らねばならぬ。けれども不幸にして、今の民衆それ自身が、餘りに物質的に墮落して居る。自分の五官に快感を興へるもののみを尊んで、たゞ金が得られるやうに、好い衣服を着て、立派な家に住んで、甘いものを食つて行かれるやうにとのみ考へてさうした慾望から、改造を叫んで居るのである。大變な間違である。

三 内容ある生命ある改造

併し私は、現代國民には精神的生命が皆無だと斷言するのではよい。だが物質的

望が餘りに激しい爲に、其の精神的慾望が壓迫されて、死に其の影を注ぎてしまつたのだとは、確に言ひ得る。これは科學勃興に誤られた影響として、人間が總て機械化され、はた物質視され、隨て物質偏重となり、それに種々の意味で、社會組織が不完全の爲め、先頃のやうな大戰が勃發すると、思ひ懸けない莫大の利益を得る者などが頻出し、其等の者が有頂天になつて、贅澤三昧をするので、一般が皆、それに捲込まれてしまつたのである。皆、眼が眩んでしまつたのである。餘に情ない話ではないか。例へば、最近の書畫骨董の扱ひ方などを見ても判る。從來は多くは物の經歷に依つて其の價値が定つたもので、作つた人の人格、描いた人の社會的地位とか低い時は、其の物品も價値はなかつたのである。然るに今日は、作者の人格如何に拘らず、畫が金粉で描かれたり、其の書の筆法が面白かつたりすれば、千金の價値を附してしまふのである。是れ即ち、現代社會が、趣味に於ても如何に低級であり、物質的に傾いて來たかを證明するものではあるまいか。現代は、實は斯る物質的本位の社會に墮して

居るから、其の改造も亦、現在生活の安泰の爲にのみ、促されて来たのである。併しながら、眼前の生活のみでは、眞の安定は決して得られない。眞の安定は、正に精神的に活きることである。

精神的に生きるとは、物質のみを對象とせず、人間以上の神佛を認めることである。即ち我が眼前に、神佛がまします。一は神佛の支配の下にある。自分は、其の一切を看取し給ふ神佛に依つてのみ、幸福なる生活を造り得る。幸福なる生活とは、金を蓄め、美しい衣服を着、壯麗なる邸宅に住むことではない。破れ家に住み、襤褸を纏ひはた又、喉を締められ、頭を破られ、全身を踏め蹴られるやうなことがあつても、神佛を信仰し得る人には、其等は、不幸でも何でもない。神佛を信する、所謂天命を知ることが、人々各自にかなつたなら、如何に物質的に改造されても、遂には再び、物質の爲に、社會の混亂を見るに至るのは、明瞭である。此の世界と云ふものは、物質的には、いつ潰滅してしまふかも知れない。太陽の光熱は冷却し、地球の形體も亡び

てしまふかも知れぬ。で、物質的な片々たる改造は、たゞ一時的の改造で、眞の意味の永遠的の改造ではあり得ない。太陽の光熱がなくなつても、地球が亡びても、尙永遠に生き得るものは、唯精神生活のみである。併しさうかと云つて、物質的改造を放擲しろと云ふのではない。唯吾等の欲する第一義的改造は、もつと内容ある永遠的改造であることを、警告したのである。殊に今日叫ばれて居る改造は、餘りに無反省な改造ではないか。

第二章 眞の安全生活

一 自己の脳中も危険

近來は、安全とか安定とか云ふ語が、頻に稱へられて居り、世間には、種々なる險悪の思潮が流行して居る。いろ／＼の險悪なる思想が蔓延して、人生に不安を來し、其の眞に安全なる生活を送ることは、益々むづかしくなつて來た。所謂安全とか安定

とか云ふ語の類に稱へられるのも、つまり之が反響であらう。而も危険思想とか、過激主義とか云ふことは、お互に他事のやうに思つて居るけれども、能く反省して見ると、斯る思想は、已に己が腦中にも、勢を逞しうしようとして居る。それは勿體ないと云ふ觀念や、有り難いと云ふ觀念や、氣の毒など云ふ觀念が薄いで來たからである

二 勿體ないと思へ

よく考へて見ると、私共は、天地の恩、父母の恩、君主の恩、同胞の恩、一切萬物の恩で生存して居る。若し其の中の一つを缺いても、到底安全に、此の世を送ることとは出來ない。

例へば一碗の御飯、一片の布にも、無量の恩恵が含まれて居る。眞面目に考へると、一草一木一石一糸、生あるものよりも、生なきものよりも、恩を受けて居る。従つて一切萬物、一つとして、無駄なもの、塵末にすべきものはない。勿體ないものばかりである。人若し、勿體ないと云ふ念に満ちて居たならば、決して餘計なことや、驕つた

ことが、行へるものではない。然るに、此の念慮が微弱となるに随つて、世に危険思想が起り、醜惡なる行爲の蔓延るのは、自然の勢である。

三 末進んで本退く

私は嚮に、札幌に於ける北海道博覽會に參つた。道すがち、所々を眺めて見るに、何處も彼處も、非常に奢侈に長じて居る。全然勿體ないと云ふ感じがないやうである。北海道は、物質的には、以前よりずつと進歩して、なにかに結構であるが、精神的には、眞摯淳朴の風が失せ、何事にも勿體ないと云ふ情緒が地を掃つて仕舞つた。地方の人の精神の廢頽は、東京が本であらうが、東京などには、すつかり、勿體ないと云ふ言葉が失せて、今の若い者は、其の言葉の意味さへ、解しないやうになつて來た。私の少い時分には、勿體ないと云ふ言葉が、一般に普及して居て、自然と身を慎み、行を正し、善を行ひ、善を行ひ、經濟を計つたものであつた。

四 勿體ないとは如何

一體、勿體ないと云ふことは、どんな意味であるかと云ふに、他愛もない、譯もないと云ふ意義のことで、そこに敬虔の念が起つて來るのである。西洋の方のことは、能く知らないが、無駄をしてはならぬと云ふ言葉は、稱へられて居るやうだ。私は之を軍人の方から聞いた。獨逸の俘虜が、夜寝るときは、屹度、電燈を消して仕舞ふ。それは日常の仕馴れた儉約の習慣から起つたものか、又は眠られないと云ふ所から、來たものであらうか。係の軍人が尋ねた所、その俘虜の云く、それは電燈には、言ふことの出來ない程の手數がかゝつて、出來上つたものである。其の發明者の苦心を初め、安全に一室に導くまでには、その位の心勞と手數とがかゝつて居るかも知れないそれを睡眠中に點けて置くといふのは、無駄なことであると云ふ意味のことを、申したさうである。

それから先頃、廣島に於ける俘虜を勞らはん爲、兵卒に酒を出した處、吾々はかう云ふ馳走は頂く譯にゆかぬ。これは將校の飲む酒である。私達には無駄であると云ふ

意味のことを言つたさうである。その自分と云ふことを知つて、勿體ないこと、無駄なことは、寸毫もすまいとする所は、流石は瘦せても獨逸仕込、感心なことである。

然るに古來、君子國と稱へられた日本の人にして、勿體ないと云ふことを忘れて、何でも我慾を満すことのみ努めるやうでは、外國人に對して、何の面目があらう。儉約をなくしてはならぬ。無駄なことは嚴禁すると云ふことがなかつたら、どうならう國家の將來は恐るべく、自他の幸福は、得られないであらう。言葉を換へて言へば、儉約するとか、無駄なことをしないと云ふことを、已むを得ずして行ふこと位に思つて、自ら奢侈に流れ、我れも苦み、人をも苦めるやうでは、實につまらぬ極點である

五 何事も有り難い

も一つは、何事も有り難いと考へることが、大切である。前申すやうに、人間は君父師を始め、どんな人よりも、物よりも、直接又は間接に恩を受けて居る。いろいろの人や物の恩恵に依つて、生長し、活動し、安全に生活することが出来る。故に何

者に對しても、恩恵を感じ、感謝の念を持たねばならぬ。それがないと、親に對しても、お上に對しても、同胞に對しても、其の恩恵はないで、世話になるのは、當然である、交換的である。自己の権利であると云ふ感じほかない。此の當然と云ふことに就いて昔の人は、本務を果すことを當然と思つたが、今日の権利思想からいふと恩恵を受けることこそ、當然であると云ふ。此の點が實際上、非常の懸隔を生ずる。東洋の道徳は、自己を没了して、之を社會國家人類に捧げるのであるが、西洋の道徳は之と反對に、國家も社會も、自己の爲めの存在である。國家や社會や君父師が、自己を保護するのは當然であるが、其等の恩を報いるのは、當然であるとは思はぬ。此の點が、日々の行動上、天地の懸隔を生ずる。

明治の中年、山岡鐵舟居士は、勳功に依つて、子爵を頂戴した。初め居士は、私には何の功勞もござりませんと、固く辭退した。思ふに自分は、幕府の爲めに奔走したことがあるけれども、それは祖先以來、三百年間、祿を頂いた恩義に報いたただけで、

それで、十分、恩が報いられたとは云へぬ。つまり當然のことをしたに止つて居る。それを殊更に手柄などは、夢にも思ひませんと、實に西洋主義とは、正反對である昔では、子が親に孝行するのは、當然であると思つた。今日は子が親に教養を受けるのは、當然であると云つて、親に對しても、誰れに對しても、直き理屈を言ひ、我儘勝手の行爲をする。こんな風では、社會どころか、一家の中すら、安全には行かない

六 氣の毒に思へ

も一つは、人を氣の毒に思ふことである。言葉を換へて言へば、同情する。思ひ遣るのである。近來は慈善をする人はあるが、義理一片で、不性無性するか、甚だしきは、廣告的商賣的にして、より多くの報酬を得ようとする。

私は嘗て、東洋大學を管理したことがあつた。其の時の卒業生が、先程、私方に訪ねて來た。彼れは乞食をして、眞に下情を知り、人情の機微、世態の真相を穿たうとした。足がけ四年、東海道より九州まで行つて坑夫までした。そこで下層の状態から

人情風俗の微まで、よく分つた。その實驗談に云く、最も感じたことは、門構の家に決して慈悲心がない。一杯の食も、一夜の宿も恵んでは呉れぬ。そして最も同情のあるのは、貧賤の人に限る。殊に信仰心の強い者ほど、同情心に富んで、慈善の事を行ふものである。人情の浮薄なのは、拜金宗の人か、知識ばかりに長けた人である。而も三池炭鑛の坑夫になつたことがあるが、坑夫は外見上、如何にも亂暴さうであるが、其の實、坑夫ほど禮儀の正しい、同情のあるものはない。それは名譽心からではない、金の爲めではない、理屈を知つてゐない、實際的に古風の道徳に依つて、さういふ規律と秩序とが嚴存して居るのである。偶々人殺までする者がなくてもないがそれは規律を破るものに對する制裁で、彼れ自らの胸中には、一點の曇りもない、言はず道徳の低度が低いといふだけで、却て上流の人、富豪の人に、見ることの出來ぬ美點があると。さもあるべきことであらう。

七 安全の生活は是れ

さて精神上の安全週間としては、勿體ない、有り難い、氣の毒であるの、此の三つに注意して行つたならば、お互に眞に、安全なる生活を送ることが出来る。思へば人世は實に、たよりないもので、いつ如何なることがないとも云へぬ。それでも修養が深く出來、道徳心が堅固であつたならば、どんな災難があつても、狼狽へぬものである。また人若し同情心に富んで居たら、相手の人は喜び、世の中が圓滿に行けばか、自分は假し其れが爲めに斃れても、遺族に對する同情は、四方より集り、世の保護を受くるに違ひない。悪人の子孫に對する、社會の待遇とは、正反對になるものである。

八 絶對に歸依せよ

先頃、東洋大學名譽學長井上圓了君が、突然滿州で逝くなつた。その電報の來る少し前に、私の所まで手紙が來た。それは支那天津發であつた。排日騒動で、餘程難境に遭うたが、漸く血路を開いて、滿州に向ふとのことであつた。私は、其等のことを

思ひ浮べて居る中、忽ち死去の凶音に接した。實に人間の壽命は、朝夕を計られない
老いも若きも男も女も、一度は必ず死なねばならぬ。今までは盛に活動して居ても、
いつ斃れないとも云へぬ。考へると人世は、頼み少いものである。斯ることに気がつ
かないで、日に我慾を張り、利己を主張するやうでは、實に果敢ないことである。せ
めて元氣で居る間に、善いことをして置きたいものである。何時までも生き得ると思
つたら、幸福は何時でもあると思つて、氣儘の仕放題したり、人の缺點を拾ふやうで
はいけぬ。自分の落着く所は如何、安心立命を得なくてはならぬ。此に於て宗教の必
要が生ずる。人間以上の絶對の力に歸依する。即ち自我を絶對の神（如來）に任する
と云ふことになる。人の居ない所だからと云つて、悪いことは出來ぬ。他を排して
自利一點張をする譯に行かぬ。如何なる憂き艱難にも、堪へられないことはない。此
の絶對に歸依すると云ふことが、尤も力ある安全生活であると思ふ。
要するに人は、私共の根元にして歸着とも云ふべき、人間以上の絶對（神、如來）

に身を任せて各自の本務を遂行したいと思ふ。

第三章 労働問題の解決の鍵

一 能率増進の根源

春めいて暖氣を催して來ると、草も芽を出し、花が開き鳥が歌ひ出し、天地間に於け
る萬物は能く育ち、實が成熟するのであるが、その根元は暖氣に因るのである。自然
界が然る如く、又人事界に於ても同様である。

近頃は労働時間と能率増進と云ふ様なことが論じられて居るが、能率の高くなるの
もならないのも、その根元は人心の上に暖みと云ふものが存して居るか居ないかに
因るのである。幾程財産が多くあつて思ふ儘になりて、設備が行きどいて居ても、
人心の上に暖氣と云ふものが無く、寒中の様な冷えきつた状態では、能率と云ふもの
が高まる理のものでない。然るに世人は、一向そこに氣が付いて居ない。例へば農作

物にしても、たい肥料を多く與へ、耕作を勤んでも、それだけでは成熟する理のものではない。どうしても太陽の暖氣と云ふものが加はらぬことには、完全に發育が出来るものでない。人間の精神上に於ても、常に春の如き氣分が生じなければ能率は高まらないのである。故に人心の上に暖氣を生じさせることが急務である。近頃の如く、労働問題がやかましくなり、罷業や怠業やの起るのは人心に、暖氣がないからである。幾程給金を増し、制度を能くするも、それはほんの一時だけ鎮つて居るので、永續きはしないのである。故に労働問題の根本的解決は心から春の如き心持になつて、それから出た増給や設備であり、常にその心持が、生きて働いて居らねばならぬ。

二 労働問題の解決

然らば、人心の上の暖氣は、如何にすれば生ずるかと云ふに、それは先づ自分の心底に互に恩分を感ずると云ふことである。即ち報恩の心が人心の上に暖氣を生ずる根本となるのである。そこで總ての人心の上に、報恩的觀念の湧く様にするのが、労働

問題解決の一番大切な鍵である。故にこの報恩的觀念さへあれば、資本家は自分の安樂なる生活の出来るのは自分の力でなく、労働者が働いて呉れた御蔭であると、感謝の念が生ずるのである。又労働者に於ても自分の食うて行く事の出来る様に、仕事を與へて呉れたのは、全く資本家の御蔭であると、両者が御互に恩を感じあひ、有難い事であると思ふべきが當然である。たとひ時間問題や増給問題か持ち上つても、前述の如き暖い心情から相談すれば、平穩に解決がつくのである。

三 生活改善と宗教

そこで宗教の宣傳とは、一面から云ふと、總ての人間の心に、報恩の念を懐かすことで、精神上的の春を迎へさせることである。故に人心の改造であるとも見られるのである。就中我々の奉じて居る佛教の如きは、社會の下層の人間に對して、迷へる者の光となり、乾びた心に報恩と云ふ美はしき心と呼び醒すものである。宗祖の如きは、何れも今日の言葉で云へば、世界改造の先驅者であつた。それは上流の人々の人心改造

にとまらず、殊に下層の人々の精神改造と云ふことに就ては、非常に盡力せられたので、労働者の味方となり、暖みを與へ、悦びを與へたのであつた。彼の漁夫が生死の巖頭に立つて安心を得、彼の農夫が貧しき生活に居て、歡喜法悦の念に滿されて働いて居るのは、總ての不平不満の邪惡なる人心を改造した信念の力であつた。こゝが謂ゆる佛教に云ふ惡人正機と云ふ、一面の説明ともなるのであつて、惡人とは法律に觸れて居る罪人だけを云ふのではなく、下級の人間と云ふ意味にもなるのである。宗祖は上層の者を相手とするよりは、下級の人間を相手として、佛の光明を與へ、報謝の心を起させたので、期せずして世界改造者となられたのである。蓮如上人の如きは、それが著しく現れて、年々租税を忘たらぬやう、地主に對し領主に對しても粗略の儀なく勤むべきことを勤めさし、仁義を以て本とし、王法を表とすることを勤められたのである。今日もそれなくては、労働問題の解決はつかないのである。

四 眞の解決と信念

一體人間は、何によつて生きて行けるのであるか、食物を取つて生きて行けると云ふが、夫れは自分がこしらへた物か、他の人がこしらへた物か、人間が作った物か、天地が造つた物かを熟考せねばならぬ。又働くから生きてゆけるのか、その働かさして呉れるのは誰のお蔭か、これ等を考へると、天地萬民のお蔭でないものはない。さうなれば人間が報恩せずには居られなくなり、權利を與へて呉れた故、義務を盡さずには居られなくなる。人間の道徳は、この義務をはたすことで、換言すれば御恩報謝の生活である。然し、義務があるから、義務を盡すのであると云ふ様な考へでは、眞實の働は出来ぬ。眞に義務を盡すのは、有り難いと云ふ思つたときに、義務を苦しいと感せず楽しんで盡すことが出来るのである。さうなるには、宗教の信念によらねばならない。宗教に於ては五十年や八十年やの現在のことばかりでなく、永遠に救はれるのであるから、心から佛に對して報謝する思ひになりて、義務の爲めではなく、自分の爲に報謝し努めると云ふ様になるのである。今日の急務は、この信念に住する

ことである。この信念によらねば徹底的の解決は出来るものでない。

第四章 人生の第一義

一 傳染病と修養

毎年夏期には、傳染病が殊に多いが、此の傳染病と云ふものは、單に肉體上の病氣に限らず、精神上にも之を見ることが出来る、毎日新聞紙上の三面を賑して居る所の所謂、精神に異状を來して自殺したり、他殺したりする種々の事件は、其の性質に就いて察して見ると、矢張り一種の傳染的のものであるやうである。所で傳染といふ字義語義から考へて見ると、此は雷に、悪い方のことばかりではないので、人の精神的傳染は、又善い方面にも行はれるものであることを知らねばならぬ。人間は兎角模倣の動物で、又刺戟暗示に動かされ易い感情の動物であるから、善い方にも悪い方にも直ぐに傳染して、其の中に引込まれて了ふ。人間の修養といふことは、此の悪い方の

傳染を避けて善い方に成るべく傳染するといふことにある。殊に少年少女の時代に於て、此の傳染性が最も激しいものであるから、例へば新聞の三面記事の如き、或は柔らかな、なまぬるいやうな人情小説の如き、著しく人の感情を刺戟する物は、青年の士は、餘り讀まぬがよく、總て惡傳染を受け易い見聞は、斷じて視聽に觸れぬやうにせねばならぬ。而して其れと同時に、古今東西の聖賢が遺された言論行狀等を記せる物は、少しでも多く、之を讀むがよい。凡て道德信仰等の上に於いて、常に善良なる眼見耳聞を以て、自分の精神を養ひ、大いに向上せしめねばならぬ。

精神的傳染とは、佛教で云ふ所の薰習である。知らず識らずの裡に於いて傳染した習慣は、殆ど天性を形作つて、善にもあれ惡にもあれ、容易に抜き取ることが出来ぬようになる。魚市を通る時は、市を通り抜けても、未だ嗅いやうな氣がする。名香を衣に焚き込むに、香は盡きても、尙ほ餘香あたりに薰する。所謂薰習の力は、猶ほそれが如くである。人常に之を思ひ、惡しき薰習を恐れ慎み、同時に善き方面の傳染を

喜び感受するように力める。それが即ち修養である。

二 自家の珍寶は是れ

金錢は實に世の貴い寶である。併しながら此の貴い寶も、赤裸にして其のまゝ、目前に擲げ出された時は、眞に卑しく汚いやうに感せられるが、此れを紙に包み、水引を懸けて出す時は、始めて清く貴く見える。人に於ける才能知識も、恰も金錢の如くで、單に才を恃み知識を振り廻すのでは、何事も實效を收め得られるものでない。併し、才能よりも知識よりも、先づ大切なものは、誠實といふことである。誠實と云ふ包みによつて、あらゆる才智も能力も、始めて立派に活用されるので、如何なる事に従事するにも、如何なる人にも、最も大切なものは誠實である。世の中の人は随分偽りも多く、又欺かれ易いやうであるが、一面に於いては案外正直で、公平なものである。所謂衆目の見る所、十指の指す所で、誠實を以て事に當るものは、自然に社會から同情され尊敬されて、名譽幸福は期せずして身に集まるやうになるが、誠實なく詐偽多

き輕薄才子は、たとひ才智に任せて、一時に成功するが如きも、竟には必ず世より擯斥せられ、轆轤失意の境に沈吟せざるを得ないやうになる。實に處世上一貫の道は、唯誠實あるのみである。

元來宇宙の眞相は、誠實なるもので、自然は曾て偽りあることはない。之を眞如と名づけ、實相と名づけ、妙法と名づけ、或は阿彌陀とも名づける。或は又之を天といひ、命といひ、性といひ、道とも云ふ。所が宇宙といひ、天地といふ、近く之を身に就いて求むれば、吾々の五尺の身も、亦一個の小宇宙である。小天地である。宇宙の常相、自然の當體が誠實であれば、吾々五尺の天地も、其本然の性は誠實である。吾々は、先天的に誠實といふ。人生最尊最貴の珍寶を個有して居るものでありながら、所謂寶の持腐となつて居るは、哀むべきことである。宇宙自然の誠實と合致するといふと、非常に大きな、頗る困難な問題のやうに聞えるが、さう至難なこと、不可能なこと、思つてはならぬ。元來無いものを造り出すといふのぢやない。固より固有のもの

の、自家屋裏の所有物で、吾々が無始劫來無明煩惱の爲に、此の貴き固有の寶の光は蔽はれて居るのである。既に自ら寶藏の所在を知る以上は、専心工夫して、之を開く鍵を自ら作り出さねばならぬ。其の鍵とは何か、勇猛精進、たゞ勇氣である。「慈なるが故に勇」と、慈とは即ち誠實心で、たゞ誠實に終始一貫、専心怠らず精神的努力を續け、總ての妄念妄情の偽りを拂ひ退けて、一直線に進む、是れ眞の勇で、此の偽りなき勇氣があれば、寶藏は自ら開けて、自利々他、如意自在、盡くるなきの珍寶を受用することが出来る。即ち五尺の身、五十年の生涯を以て、無限絶對の宇宙自然と冥合することが、人生の第一義である。

三 子弟への教訓

因に子弟に對して特に申すなら、人世は實に複雑で、處世の道は最も容易でない。人に男女、貴賤、上下、尊卑あり、職に農工商あり、一口に學術技藝といふも、今日益々多種多般で、此等の複雑多般なるものを、悉く得んことは、勿論限りある能力

を以て、出来るものではない。唯何でも良いから、一つ自分の立つべき事業、自ら進むべき路を定めねばならぬ。即ち志を起し、目的を立てることが必要である。古人も「志立つて學半成る」と云つて居るやうに、志さへ確に立つたなら、何事も成就の端緒を得ることを、了得せねばならぬ。

第五章 中正と反省

一 昭和時代の吾等

我々は、昭和と云ふ年號を頂いて居る以上、精神も行爲も、益々昭和になるやう、心懸けたいものである。單に國家や社會上の事のみならず、家庭の上にも個人の上にも之を及ぼしたいのである。昭和と云ふ語は、仲々意味の深いことであるが、分り易く云へば、廣く大きくして、物事に偏らず、程を得て正しくすることでありませう。

二 世界的と中正の心懸

今日は昔とは違つて、世界的となつたのであるから、男女共に世界の大勢に眼を着けて、身の爲、家の爲、國の爲をせねばならぬ。そこで婦人は、引込思案でありさへ、すれば宜しいかと云ふに、無論婦人の天職や特性を忘れてはならないが、能く時代に應じて進んで行くことは、大切である。一體明治時代には、大分婦人の思想も、世界的、進歩的となつたやうであつたが、又物事に程を得て正しいと云ふことが、乏しくなつたやうである。それでは、眞の文明人とも云へず、國家の爲ともならぬから、大正時代の人は、益々精神も行爲も、中正になさるゝことを希望する。

三 反省こそ大切

中正と並んで今日の人に、殊更必要な徳目は、反省である。人は動もすれば、感情の爲に道理を晦さるゝもので、従つて自分を省みて行く。即ち反省と云ふことが、大切になるのである。私は、先程紫柏全集を読んだのであるが、其の中に、「大抵の人は自ら反省すること能はざるを悲む。既に自ら反省すること能はず、唯達観救ひ得ざる

のみならず、諸佛をして、又手の下す所なからしむ」と云つてあり。誰でも情を制して、理に従はうとするには、自ら反省することが、何より大切である。已に心を空しうして、我が身を省みれば、我が身の行届かぬ所が、能く分つて来る。幾ら人より、宗教や道徳や修養の話の聞いても、自分の心の中、自分の行は、果してどうであらうと、省みる心持のない人は、到底善い方に進むことが出来ぬ。假ひ聖人や佛の慈悲でも、至つて救ひ難いのである。人間は坂に車を押すが如く、油断をしてはならぬ。少々修養は、怠ると直ぐ後に戻る。毎日怠らず效を積むべきで、それにつけても、反省が必要になり、自分に振返つて、自分は物を僻んでは居ないか、物に偏つては居ないか、物に執着しては居ないかと反省し、悪かつたことは、氣のつき次第直して行くのである。

四 節操と反省

次に特に申さねばならぬことは、節操のことで、讀者の中には、そんな人はないの

であるが、一般の人には、節操のない人が少くないやうである。節操と云ふのは、男女間の貞操ばかりを云ふのではなく、物事には、主義主張があり、守るべき所がなくてはならないから、正しい道は、何處迄も變へてはならぬ。人間に節操のないのは、竹に節のないのと同様で、節のないのは竹でないのと同じく、人にして節操がなかつたら、人ではない。自分勝手な都合の好い方へのみ行くのでは、犬や猫と相距ること遠からぬのである。此等も感情に引かされて、反省しない結果なのであるから、人は日々反省しつゝ、自分の守るべき道を、何處迄も守つて行かねばならぬ。

第六章 忠言を感謝せよ

一 忠言を容れよ

人間と云ふ者は、如何なる高貴の方と雖も、聖人佛者を除いては、些少の缺點も無いと云ふことはなく、如何なる人も、他人から忠告意見されることは必ずあるのであ

る。其の場合には、謹んで聞き喜んで改めるが、最も肝要なのであるが、兎角さうばかりは行かぬもので、自身は悪くないが、人から何か聞いて、人の評判を眞に受けてそんな事を云ふのであると思うて言譯する。又は却つて怨んだりする。そんな事では再び忠告をして呉れるものはなくなつて了ふ。すると自分の善からぬ行も、直らぬことになるのであるから、自分に缺點のあることは、常に豫め承知して置き、又豫期せぬ場合にも、間違はよくあるものであると考へて居ることが必要で、さうすれば、忠告を嘉納する事も出来、其れによつて、直して行くことが出来る。そんな心のないのが、即ち「我」と云ふもので、此の我が増長しては、過失は遂に直らぬものである。

二 我を捨てよ

釋尊も無我と仰せられた通り、佛法にはおれがと云ふ我慢心は禁物である。一寸へると、自分には、そんな考はないと思へるが、若い人などが、氣の利いた風をして見たいと思ふのは、即ち我で、佛前で禮拜したり、屈んだりするのは女々しいと思ひ

釋迦何するものぞと思ふのも、皆此の我である。さと云ふ心では、真理にはあてはまらない。眞の道理に協ふには、高慢心があつてはならない。佛に頭を下げるのが厭では、眞の佛教徒とは云へない。禪宗でも其の他の宗旨でも同じ事で、禪宗は氣が利いたやうであるが、矢張り我の心があつては、駄目です。釋迦の頭をなぐるやうになるのは、此の我がなくなつてからの事で、さもないに我を出すと、直ぐ三十棒を食はなければならぬ。どの宗旨でも、言ひ方が多少異ふだけで、此の五尺の體を我と思ひ、一番豪いと思ひ、他のものは自身以外のものであると思ふ内は、大きな悟は開けない體即ち天地、心即ち法界と一致せぬと、悟は開けないのである。此の我があつては自力門、他力門、何れも駄目、世間を見るに、自分が悪いと思ふものがないから圓く治まらないので、罪を人に嫁せず、自分に引き受けて過れば、喧嘩も出来ないのである。相手の人も、其の非を知つて、遂には過つて来るやうになる。或處に極く家内中睦まじいのと、喧嘩ばかりするのと、二軒の家が隣り合つて居た。前者、學問もな

い平凡な人間、後者は、學問もあり物の分つた人であつたが、其の學問のあつて、能く喧嘩する方が人が、或時隣家の人に、自分の方は、皆何事も出来るくせに、始終悶着が絶えない。お前の方は一體どう云ふ譯で、さう仲好く納つて行くのか、何そ方法でもあるのか、教へて呉れと云ふので隣家の主人は、「自分の方は皆悪いものばかり故圓く納まるのである。何か過があつても、自分が悪い、私が悪いと云ふ風にするからである」と答へたと云ふ話である。能く注意すべき事である。

三 恥しく思へ

自力の方も無我がある。別して他力門では無我が第一で、若し我があつては、淨土參りは出来ない、信心は得られない。幾ら搜した所で自分の腹の中から、これは善いと云つて持ち出せるものは、一つもない。皆佛の御恵みによつて、時に好い心も起きるので、さうなければ、他力の信心を得た人とは云へないのである。正信偈に邪見橋慢惡衆生、信樂受持甚以難とある如く、我のあるものは助けられません。一文の値打の

ないものが、ごうして助かるか、一切佛の大悲の光明、不思議の力を仰ぐ程、自分の力のつまらない事が分り、反對に、佛の力の無限な事が分るのである。丁度御殿場邊で富士山は、頭を擧げぬと見えないので、山のたと自分の小とが、能く分ると同じやうなものである。高大不思議の大威徳を思ひ、恥しいと云ふ心持が起ると、信心は生ずるのであります。

四 忠言を感謝せよ

我々凡夫は、ごうかして自分の心を、人に直して貰ひたいものであると、常に心懸けて居て、自分の心中を腹藏なく同行の中へ打出すがよい。包み隠すから直すことが出来ないものである。誰にだつて過失はあるのであるから、少も恥しい事はない。それを心得て居ないと、人の前に心を出す事は出来ないものである。又目下の者から何か言はれると、直ぐに腹を立て、了ふなご、云ふことは、實に淺しい事である。自分に忠言をしてくれるのは、即ち親切なのですから、假い如何なる人にでも、大に感謝すべき筈

なのである。でないと、徳を取り損するばかりでなく、對手の人も腹を立て、遂には世間に觸れ廻られる、大損になるのであります。一體人の悪い事はよく見えるが、自分のは見えないと云ふのが一般である。自分に見える程なのは、よくくの事なのであるから、第一に改めなければならぬが、又人の忠言を能く信用して、唯安心して了はないで、能く謹み、能く改めなければならぬのである。

第七章 世界思潮と忠君愛國

一 混亂の物心兩界

現今世界の趨勢は、世界的大旋風の影響を受けた結果ではあるが、精神界物質界共に、全く混亂の頂點に達して居ると云ふべきで、殊に精神界には、非常な大動搖がありはしないかと、杞憂される。我が國も物質的には、已に此の渦中に投じ、しかも光輝ある日本の軍隊は、何時も連戦連捷の榮を擔つて居たが、一方眼を轉じて精神の方

面を觀察したならば、其處に眞に世界に誇り、心安く思ふことの出来るものがあらうか。

二 自己中心主義

先頃も、我が佛敎界の人々が集つて、現下の我が國民精神の現象に就いて攻究したのであるが、今や我が國は眞に眼覺める必要はないであらうか。世界的大戰亂にしても、要は彼の國々が、自己を主張するの餘りに急なる處から起つたのではないか。固より、その他種々の原因は數へられるが、一面〇〇の自己中心主義が因をなして居たことは明かである。自己中心主義とは、人はどうでも宜いと云ふ主義で、或る點は良いが、多くは他に迷惑を及ぼすものである。若し世界の總てがさうなつたら、國際道徳も、その必要はなく、あらゆる方面に於ける道徳は、全く地に墜ちてしまふだらう。

三 正義公道の國是

我國の國是に、さうした傾向はないであらうか。元來我が國は、昔から正義公道を

主とし、萬機公論に決する國であることは、今に變りない。

併し個人の心的傾向は、種々に混惑され易い以上は、自己中心主義がないとは云へない。維新の革新以來、海外の文物を吸集するに熱中せし結果、正も邪も共に消化しようとし、又彼の地の總て出發點を異にした思想なり、宗教なりを取り入れて、自家のものにしようとして居る傾向があるのは否まれない。而して知らず識らずの中に、その思想に感染して怪まぬやうになり、一方茲に危険なる思想傾向を有する者も生ずる譯である。正義正道が破壊される虞がないとも云へぬ。

四 信仰の基調は佛敎

我が國信仰の基調は、固より佛敎である。欽明の朝佛敎が渡來して以來、一千有餘年の間あらゆる人士の思想に食ひ入つたのは、佛敎である。しかもそれは、神儒の敎以外、更にこの精神界を支配する大なる力があつて、深く我が國民性と一致し、歴史的年代を経るに隨つて、眞に我が國民生活に一致するやうに洗練されるに至つた。從

つて今日と雖も、全く國民生活の眞の意義に一致し。あらゆる精神界の指針として力あるにも拘らず、世に往々、佛教信仰の價値如何を云々するものがある。固より事理を解せざるの甚しいもので、現在は固より、將來と雖も、この國家の榮ゆる限り、我が佛教でなければ、我が精神界を支配する事は出来ない。我が佛教の實際的長所は、即ち彼の平等即差別、差別即平等の眞理であつて、自己中心主義に墮ちず、又博愛主義に偏せず、差別と平等と共存する所が尊い。かうした處から出發して、總ての方面に及ぼしたなら、世は穩かに福利あり、眞に平和の夢を樂むことが出来るであらう。然して他の諸宗教の説く所も、我が佛教の説く所と、究極する眞理は同じでなければならぬのに、さうは行かず、飽くまでも、己れを主張し、其の結果、理由なき戰亂を起すやうにも立ち至つたのである。

五 皇室は即ち國家

國家問題にしても、彼の地の思想は、全く我が國と異なるを見てよい。即ち國家と

皇室とは別のもので、皇室は亡んでも、國家は亡ほすべきでないとするのが、彼の地の重なる傾向で、従つて忠君愛國の思想も、君に忠なると國を愛するのとは別で、結局國を愛するのは、自己の繁榮を冀ふが爲、忠君は愛國の結果と思考するので、我が國の思想とは全く相容れぬ。我が國に於ては、忠君は即ち愛國であつて、國家と皇室とは別のものではないから、國を愛するのは即ち皇室を愛するのだと云ふので、皇室即ち國家である。茲に我が建國の精神と、長い歴史に培養された國家的觀念の、世界に誇るべき長所が存して居るので、君の御馬前に、この身を致すと云ふのは自國の爲に身を犠牲にすることで、乃至自己の爲にもなると云ふのだから、全く彼の地の思想とは異なつて居る。しかも是れは、我が建國の精神が、佛教でその根本思想を培養されて、美しい結晶となつたのではあるまいか。

六 佛教と忠君愛國

茲に至ると、眞に我が國民の根本を養ふ教は、矢張佛教でなければならぬ。吾人は

前に云つた平等即差別、差別即平等の眞理を體得して、根本的完全な信仰に進まねばならぬ。然も爲政者の施設に、動もすれば、この根本を忘れたやうな様子がありはしないかと思たれる節がないではないが、要するに如何に世が進み、文物の精華が燦然たりとも、この忠君愛國の思想を根本として、教育を進めて行かねばならぬと思ふ。文明は進み、我國の世界的地位は益々向上する此の時に際し、飽くまで獨逸のやうな自己中心主義を排し、飽くまでも我が國の精華たる忠君愛國を主とした國家主義で進みたい。斯くてこそ我が國精神界も完全に、國民の信仰も確保され、そこに美しい實の結ばれるのではあるまいか。

第八章 國民の自信力

一 自身力が最も貴い

私は諸方からの招待で、各地の講演會に臨むお蔭で、大分、地方の風俗習慣に對す

る新知識を得るが、それに就いて最も遺憾に考へられるは、一般國民が、日本と云ふ國家に對しての自信力を失つて了つて居りはしまいかと云ふことである。

一體、國家でなしに、自分の一身とか、一家とか、一町一村とか、其の他總ての事に就いても、若し自ら信する力がなければ、何事も出来るものではない。一身上に就いて云へば、學問をする上にも、亦事業をする上にも、成功するか成功しないか確實に知ることが出来ないが、兎に角行つて見ようと云ふやうな、輕薄な心では、如何なることも成功する筈はない。人が何と云はうと、また如何なる困難に遭遇しようとして、自分は如何にしても、行き遂げなければならぬ。即ち自分で如何なる困難にも打ち堪へてやり得ると信する力があつて初めて、成功するのである。其の事業の如何を問はず此の信念さへあれば、出来ぬことはない。實に自信の力はご大切なものはない。此れを一國に就いて云つても、國民に自信力があつて、何れ程までも國を保つて行けると云ふ決心が、堅ければ堅い程、維持して行くことが出来るのである。獨逸の如きが萬

國包圍の中にあつて、數多の困難に遭遇しながら、滿四ヶ年撓まず屈せず、長年の間自國を維持して行かれたのは、全く此の自ら信する力の強いことに歸着する。戦争開始前は勿論、開始後も、上に立つものは政治家と云はず、學者と云はず、總てが、國民一般の自ら信する力を強めるに努力して居たもので、獨逸人は、殆ど持ち耐へることが出来ぬかと思はれる程の苦境に達しても、尙最終の勝利は獨逸にありと信じて居たのである。

二 日本 の 將來 と 自信力

然るに、我が日本は如何と云ふに、何時も言ふやうな工合である。一番大切なる點を云へば、國體の如きは、最も好い例であらう。支那は清國が三百年も續いたけれども、自信力を缺いた爲に、脆くも亡んで、今日の如き悲境に立ち至つた。誰も知る如く、遂ひ此間、露西亞や獨逸奧夫利の皇室が、忽ちにして亡んで了つた。又種々の報告に依れば、其の他の國も何んな風に變るかも知れないと云ふ風評もあるやうな有様

で、兎に角日本を除いて外の國は、共和政治にならないまでも、實際上共和政治になりかけて居るのである。此の傾向から察すれば、日本の將來は何う云ふ結果になるか、今日の處、殆ど理解することが出来ないほどである。よしや外の國々は何うであつても、天地と共に限りなしと云ふ神勅は、幾萬年を経ても、決して變つてはならない。然るに是れを、此頃の人々に質問して見ると、十人が十人ながら、明白に答へない。甚だしいのになると、日本は何うなつても宜しいと云ふやうな、手頼ない答をする。是れ全く日本の國體に對して、國民が自ら信する力を失つた證據と云つても、敢て差支ないと思ふ。夫れには、先年の選舉運動の際であつたが、某政黨が盛んに民主思想の鼓吹をやつてから、衆の思想は一層高まつて來たらしい。若し此のまゝに捨て置いたならば、如何なる不安を伴はぬとも限らないが、何とか此處に方法を講じて、國民全體の十分に日本國家に對する自信力を強めることは、出来ないものであらうか、教育家なり、宗教家なりが、如何なる方法を以て教化に當つたものであらうか。併し

今日の教育家なり、宗教家なりが、敢てして居るやうな因循な方法を以てしては、到底駄目だ。唯神様の前に座り込んで、手を打つて居れば、それで國體の維持が出来ると思ふのは、大なる誤解である。今や宗教家教育家は勿論、國民全般が迷夢より覺醒して、重大なる責任を果す爲に努力をしないならば、到底我國永久の安泰は、希はないであらう。

第九章 人間と禮儀

一、今の人と禮儀廉恥

昔は、禮儀廉恥は國の四維と言はれて、禮儀とか廉恥とかを知らないものは、丸で人間でないやうにされたのであるが、近來は此の風が、至つて廢れて來た。勿論禮儀と云ふものは、國に依り、時に依つて移り變りのあるもので、今日の如き忙しい世の中に、何も彼も昔の儒者が教へたやうな、繁雜なことは出来ないが、禮儀を齊へる

云ふ精神に至つては、昔も今も、少しも易るべきものでない。

二、禮儀は誠敬の實現

元來、禮と云ふものは、心の内に敬と云ふものがあつて、それが外に現はれて禮儀となるのである。夫婦の親しい間柄にも、妻は夫の人格を敬ひ、夫は妻の品位を損せぬと云ふことが、外へ現はれては、夫婦別ありと云ふ禮となり、幼者が長者に對して敬ふ心があり、長者が幼者を慈む情があれば、外に現はれて長幼序ありと云はれるのである。若し心の内に敬も誠もなく、表面ばかりの禮儀であるならば、眞の禮儀ではなく、あつて益なき虚禮なのである。そこで、今日の人達の間、禮儀の亂れて居るのは、此の敬とか、誠とか云ふ精神が乏しいからで、従つて、男女の交際が亂れ、長幼の序が狂ひ、家庭の秩序が壞れ、社會の風紀が面白くなく、國家の紀綱が弛むと云ふことになるのである。

三、禮儀は心の城廓

此のやうに、禮儀は人と人、人と國との間に大切であるばかりでなく、自分一個の上からも、身を守る上に必要である。古人が「禮は心の城廓なり」又は「禮は人の幹なり、禮なければ以て立つなし」と云つて居る如く、心の誠が外に現はれては、他人に接して、自ら穩和の中に一絲亂れぬ所の威嚴があつて、人の侮を禦ぎ、人に敬はれ、滅多に人に犯されるなごど云ふことはない。彼の人には氣品があるとか、自頭の下る人であるとか云はれるのは、畢りは禮の修養あり、禮儀正しい人であるからである。

四、親鸞聖人と孔子と

彼の眞宗の祖師親鸞聖人が、常陸國稻田の里で、教化して居られた時に、辨圓と云ふ山伏が、聖人を殺さうとして草庵に乗込んだが一度其の御顔を見るや、威嚴に打たれ、一言の説法も聞かすして、即座に御弟子となつたと云ふ話や、孔子が桓魋の難を免れたと云ふのも、皆此等の人の禮儀正しい威嚴に壓へられたのである。眞に禮儀は

心の城廓である。禮ある者は、婦女子と雖も、之を犯すことは出来ぬ。實に禮は纖弱なる女子供には、刀劍や短銃以上の護身の具である。

五、禮儀の修養法如何

然らば如何にして、此の貴い禮儀を修養すべきかと云ふに、古人は「己に克つて禮に復る、久しうして誠なり」と云つて居る。己に克つとは、我儘氣儘を抑へつけることで、今の語で云へば、節制に當る。どうかすると、我々の心は、我儘氣儘になり易いもので、人と争つては人に勝たうと思ひ、人と競つては後れまいと思ひ、我が身の利益の爲には人を押除けても進まうと思ひ、骨の折れることには、人を出しても、己は逃げたく思ひ、人の物を分けるなごといふ時には、自分は少しでも、好い物を澤山取りたく思ひ、粗食よりも美食を好み、働くよりも遊ぶを好み、之が人情の我儘氣儘である。此の我儘氣儘を抑へて、利益のあることには人を先にし、勞苦のことには己れ先に立ち、萬事萬端に節制して、禮儀に契ふやうにすれば、こゝに誠が具り、禮

の修養が出来、自ら身を守り他を愛し、家庭及び社會の秩序も立ち、世の中も治り、和樂も生じて來るのである。

第十章 書は心學なり

一、書は極めて大切也

今日の人は、動もすれば書を輕んずるけれども、事務を執るにも、何をするにも、之を苟且にすることは出来ぬ。書面を認めたり、書類を認むるには、細字であれ、大字であれ、之を巧妙敏速に書くことが、大切である。一片の名刺でも、葉書の文字でも、をかしい字が記されてあると、其の人の品性氣質も想察され、厭氣のさすものであるから、況して日々の事務の上に、書が拙ければ、どれだけ損であるか分らぬ。又書といふものは、此の位精神を落着かせ、統一させるものはない。頭惱が亂れたり、煩悶があつたり、心配でもある時に、書に親むといふと、今迄の不快煩惱は、忽焉として消散し、精神の平和を得るのである。

二、丹田に力を入れよ

字を書くには、先づ姿勢を正し、丹田に力を入れ、無念無想なることを要する。外の事を考へて居たり、妄念妄想があつたりしては、善い字は書けない。心を一點に集中し、無我の状態になつて書くのである。此の時の心持は、近來流行の靜座とか深呼吸とかと同じことである。腹に力を入れないで、腕に力を入れたり、甚だしきは手首に力を入れ、更に甚だしきは、指先に力を入れるやうでは、到底碌な字は書けない、器用な字は書いても、氣品ある高尚なる、雅致ある字は書けない。

三、書は人格の表現也

書は、指先の技藝ではなく、精神の學問、腹の學問、所謂心學であり、末技でなくして、精神の表現、人格の發露である。故に書道に不自然小刀細工などは、最も忌むべく避くべきことである。書に上達せんとするには、多く字を書くこと云ふのは、技術

として正に然るべきことではあるが、尙之が根本問題として、精神の修養をなし、精神的學問をなさねばならぬ。幾ら字を習つても、精神の修養なく、學問の淺薄な人の字は品格なく、雅致なく、高妙の點がない。かの書道専門家の書は、多く其の字が器用であると云ふ丈で、氣品のないものであるし、學者偉人の書のさう上手と云ふのでなくして、何となく氣品のあるのは、全く之が爲である。最もこゝに學問と云ふは今日の所謂科學でなくして、精神の學問をさしたものである。

四、書道練達法

併し、書も亦一種の藝術である以上、初めは相當の師に就いて、其の筆法を習ひ、法則秩序を會得して、次第に自由の境に赴かねばならぬ。今日の人の如く白紙で習ふのは、同じ量なら黒い紙で習ふに優るのであるが、宛も作文が多讀を要するが如く習字も、より多く習ふことを要するから、習ふ紙は、新聞紙でも、反故紙でも宜しい手本に依つて、成るだけ多く習ひ、何時の間にか其の筆勢書法を會得し、進んで自由

の境に到達したいものである。古の學校又は私塾にあつては、字を習はせるに、草紙を用ゐ、同じ紙に幾度となく習はしたものであつた。是は儉約の上のみでなく、多く習ふと云ふ上に、効力があつたものである。宜なるかな、其の時代の方が、白紙で習ふ今日より、善く書く人が出たのである。而して字を習ふと共に、字の音訓を覚え、意義を解すると云ふ古法は、讀書力を養成する上にも、精神修養の上にも、知識修得の上にも、最も肝要のことと思ふから、復活させたいと思ふ。

五 大に習得したし

書道にしても、花道にしても、茶道にしても、謠曲にしても、一種の技藝の如くであつて、根底は精神の修養である。而して道は即ち一つである。眞に書道に熟達したならば、天地の大道も、人生の妙味、宇宙の神祕、亦自らこれに髣髴として現はれ、物事に徹底することが出来るのである。されば私共は、書は一種の技藝として親む以上、道學、心學、精神の修養として、大に習得したいと思ふ。

第十一章 釋迦の男女觀と我觀

一 釋迦の世界觀男女觀

釋迦は、絶對の悟の上に立つて、社會を眺め、何物にも差別を認めず、同一平等に取扱はれた。是れ即ち釋迦の根本的世界觀である。

男子と女子とに於て、形體の上からは、決して同一のものではなく、又當時の教育も、その兩者に與ふるに、その歸趨を異にして居たが、その本性から兩者を見れば、そこに何等の差別もない。男子に佛性があると同時に、女子にも亦佛になる性がある。此の點からして、釋迦は、男女の間は無差別であつた。

二、男女差別は取扱上の問題

當時に於ても、社會は男女に大なる差別を設け、教育上からしても、延いて差別的な教育法を施して居た。そこで釋迦の見る所によれば、從來の教育習慣と云ふものか

ら、兩者間に、知識、感情の差異を來せるものとして、智識に差別ある點よりして又感情に距離のある點よりして、男子に教へることを、直接女子に當て嵌める事は出来ない。故に、取扱に於ては、如何しても、男女兩者間を區別せぬ譯には行かなかつた。然し本性に於て、共に萬物佛性を有するものなるが故に、女子を、より善く導く時に、男子と何等差別あることなしとしたのである。

今日に於ては、世の中は、男女差別撤廢問題に就いて騒いで居るが、私から言へば、勿論必ずしも、男女差別撤廢を目して、不賛成だとは云はぬが、物には程度といふものがある以上、どの程度まで、その差別を撤廢するか、問題であると思ふ。

三 冷かに理性の判断を仰げ

自然が男女の間に差別を設けて創造したには、そこに差別に必要な、自然の大なる意義が存して居るのではないかと考へる。或點に於ては、後天的に習慣を付けられ所がないとも云へぬが、男女兩者に、相適應した性格と體質とが與へられて居る以上、

女に大きな斧を打振つて、薪を割れよと云つても、それは駄目である。男子は男子として、女子は女子として、各々其の職分を盡してこそ、家庭に圓滿な平和も生れ、完全な人生の融合が醸し出されるのではなからうか、その點に於て、古來の武士道の下に育まれた婦人といふものは、實に理想的なもので、溫良、貞淑、家庭の平和を來すに完全したものであつた。眞に目覺めると云ふのは、決して新しきを欲し、大小を失ふることではない。心ある婦人は、冷かな理智によつて、事を斷すべきだと思ふ。

四 硬教育の緊要

最後に一言するが、近頃の教育は、學校に於ても家庭に於ても、餘り柔軟過ぎはしないかと懸念する。私に見る所では、一體教育するには、教育者に生殺與奪の權利を握る程度の權力がなくては、眞に人々の性格を矯め直し、教育を徹底させる事は出來ない。軟教育に陥るのは、社會が、教育者その人に全てを委せ得ないといふ弊が、その大因を、して居る事は、争はれない事實であるから、今少し俗評に耳傾けず、過

ぎると云ふ迄の硬教育を行ふ必要がある。それでなくては、將來多難な時勢に乘出して、大事業を易々と大成する程の大人物を出すことは覺束ないと思ふ。

第十二章 夫婦和合の結婚

一 信仰と家庭

結婚問題は、男女問題の解決を先決とする。所が男女の關係に就いては、思想や信仰の相違は、大に之を隔絶するものであるから、結婚には、必ず先づ、此の信仰と思想との相違といふものを、注意しなければならぬ。然るに従來、此の信仰や思想のことを、餘り重く見ないで、結婚が行はれた爲めに後に非常な困難の生じた例は、なかく多いのである。例へば親達は神道で、養子は基督教、嫁は佛教といふやうな、甚だしい相違さへもある。これでは自然と、思想も違ふから、和合のないのは、當然と云はねばならぬ。

私の知つて居るのに、嫁の實家は熱心な浄土真宗で、嫁入先きは、固い日蓮宗の信者と云ふのがありました。或時この嫁さんが、重い病氣で、久しく床に就いたので、實家の両親は、娘を慰安し安心させたいといふので、真宗の坊様を招いて、これを先方へ伴れて行かうとした。所が一方では、「そんなことは仕て貰はない」日蓮宗で祈禱をして頂けば屹度治る。真宗などの世話になる必要はないといふので、病中の嫁を中に置いて、両方の親達が争ふので、慰めどころでなく、却つて病人を苦めたことがあつた。

此等は極端な例であるが、兎角、結婚前に此等に就いて、十分注意して居ないと、若い夫婦の間が面白く行かないばかりでなく、雙方の親達や親族などの間にまでも、不和が生ずる本となるのである。

又今一つの例は、不幸とか法華などのある度毎に、夫婦喧嘩をするといふのがあつた。それは養子に來た夫が、母は神道だから、神式にしたいといへば、細君は家代々佛教

の家だから、決して神道の式はして貰はないと、言ひ張る如きである。

又ある家では、両親の信仰が違ふから、お互に子供に對して、宗教的話はしないといふのもある。實に氣の毒な、そして子供にとつては、實に悲むべき家庭である。

此等は何れも結婚前の注意が足らなかつたから起るのであるから、これから結婚しようといふ人々は、必ず先づ、此の信仰や思想の相違といふことに、深く注意して頂きたいものである。

五 物質より精神こそ

昔流の結婚は、殆ど両方とも、親まかせであつたが、今では男女の本人同志の意志を極端に重んずるやうになつて來たやうである。本人の意志を重んずることは、眞に善いことであるが、矢張り大體は、萬事に経験の豊富な両親の意見を主とした方が、危険がないと思ふ。

結婚は若い男女二人のみでなく、雙方の両親の性質や、雙方の家風を能く見て、同

時に親々と雙の家庭が、うまく結合しなければ、始終が圓滿に治らないのである。此等の點はなるべく、經驗も知識もある所の、兩親の意見を重んじなければならぬと思ふ。

近來は位置とか、財産のみに眼をつけて、他はごうでもよいといふやうな、結婚も行はれて居るが、是れは甚だ良くない傾向である。それでは、物質上には先づ幸福なやうに見えても、精神上には全く價値のない、實に淋しい、恐しい家庭といはねばならぬ。

尙ほ結婚しようといふ男女の雙方の親か、或は親族の者の中に、よく話の解る人があるかごうかを、考へる必要がある。是れは非常に必要なことであるから、必ず忘れてはならぬ。若し此れがないと事が起つた場合などに、仕方のないことになるから、屹度これは注意して居なければならぬのである。

次には申すまでもなく、相手の男女の性質なり、體質なり、知識なり、或は世に立

つて行くべき能力などを、よく調べることである。斯様に能く注意して、結婚が行はれたならば、夫婦は勿論、雙方の家庭も至つて圓滿で、子供の教育も、實に完全に行はれるから、最後まで、幸福な結婚を喜ぶことが出来るのである。

六 親子夫婦は未來まで

眞に幸福な結婚といふものは、決して財産や位置のみを本とした結婚によつて得られるものでなく、深い恩分と厚い情誼とを本とした結婚から得られるものである。佛敎では、親子夫婦の縁は、此の世一生だけのものではない。二世も三世も結ばれるものであるといふので、前世から未來までも、切つても切れない固い縁で結ばれて居るのであるから、夫婦親子は一つの身、一つ心のやうなもので、一度結んだならば、如何に氣まづい事があつても、決して別れるとか離れるとかいふことは、出来ないものであるといふ信仰がある。従つて理屈がましいことは言はなくとも、濫い情誼で結んだきり、容易に解けないものである。

此の信仰の中に、柔和な併し強い思想があつて、如何なることにも、破壊されることのない、眞に圓滿で幸福な、實に楽しい家庭が造れるのである。子供の時から、此のやうな家庭に育つならば、これが成長して、父母に事へるやうになつた場合に、又更に家庭は、幸福を増すのである。

第十三章 松平樂翁公の女訓

一 女は柔かにして順へよ

有名な松平樂翁公の書かれたものの中に、「樂亭かな筆記」といふものがある。是れは總じて女子の心得方を書いたもので、其の中の一節に、「をんなは唯柔順とてやはらかに順ひ、いかにも正直にしてよろづ卑しからず、ものしづかにこそありたけれ」と云うてある。其の中の「やはらかに順ひ」など云ふ事は、昔流の教訓である、女大學的の語であると思ふ人もあらうが、併しよく考へて見ると、今日の女子に對す

る教訓としても、等閑にしてはならぬ事となる。柔かに順ふと云つても、強ち骨抜き縮のやうになれと云ふ意味ではない。先づ平日家に在つては、娘ならば親の意見に従ひ、妻ならば夫の意見に従つて、萬事を處置するやう、自分の一料簡で、我儘を押立てないやうにすることである。

二 浅い學問を鼻にかけるな

概して女と云ふものは、少し學問でもすると、直ぐにそれを鼻にかける傾向があるが、人間には「たしなみ」が大事であるから、此の如きことは、女子として、特に慎まねばならぬ。一體學問には深淺の別があつて、一通り眼前の理屈が解つた位では、未だ浅い學問である。中學卒業や高等女學校卒業は、先づそれ位の程度のものに過ぎぬ。然るに世の中は單純な只一應の道理だけで済むものではないので、其の外に再應の道理がある。即ち道理以外に道理があるものである。而してその再應の道理は深い學問を修めたものにして、初めて解るので、世間の事物は、そこまで解つて居な

いと、満足に裁いて行けるものではない。されば女子たるものは、成るだけ、自分の瘦我慢を張らずに、先づ親なり夫なりの料簡を聞いて、萬事を滞りなく處置して行くべきである。是れ即ち、やはらかにして順ふといふことの本旨である。

三 柔順にも種々ある

所が世間には愚な親達や、賢くない不行届な夫が往々ある。此の如き親達又は夫を持つた時でも、何事に限らず、従はねばならぬかと言ふに、決してさう云ふ譯ではない。若し親や夫の意見が誤つて居る時には、其處に少しく分別を加へ、自分の料簡を提出しても、感情の衝突が起らないやうに、親や夫に、自分の意見をよく、納得させた上で、家事萬端を處置するが宜しからうと思ふ。是亦やはらかにして順ふと云ふものである。兎に角親や夫を押し除けて、自分の料簡を一本鎗に押通さうとするのは、柔順とは云へない。若し斯やうにして進む時には、遂には牝鶏の晨するといふ鹽梅しきになり、甚しくなると、家を滅ぼし、身を破る源となるかも知れない。

又「いかに正直なれ」と云ふのは、勿論人間は何人もさうでなければならぬ筈であるけれども、特に女子に對して大切である云ふのは、細い事に就いて、ちよいと不正直な事をするのは、男子よりも割合に女子に多いからである。尤も教育が今日のやうに進歩した上は、昔のやうな事はあるまいが、併し家庭の瑣事は、やがて國家社會の大事を産む源となつて了ふ。

四 萬づ卑しからず物靜に

次に「よろづ卑しからず物しづかにこそありたけれ」とあるのも、一般女子、殊に今日の女學生達には緊要のやうに感せられる。下婢を使ふにも、子供を教ふるにも、人に挨拶するにも、下品にならぬやうにすることは、極めて大切で、又物靜かに緩々と落着いて事をする事は、閑雅と云つて、女として是非かくありたいものである。然るに、女學生の中には、勿論若い者であるから、無理もなからうが、この點の缺けて居る者が、多いやうに思はれる。それでは、假ひ學藝に上達して居ても、立派な婦

人とは云へない。斯う云ふと、今日の女學生は活潑で宜い、静かなど、いふのは、昔の女のことであると云ふ人もあるかも知れぬが、言葉こそ違へ、活潑と閑雅とは、強ち反對ではない。人間たるものは、女子に限らず、活潑が必要であると同時に、閑雅と云ふことを離れてはならぬ。今の所謂活潑といふのは、大聲に喋り、大股ひろげて歩くといふやうなことであらうが、其の實は、品よく、きり／＼と、物静かにする所に眞の活潑てふものが存するのである。甲斐々々しく萬事を處置し、臺所で下婢の手傳をしたり、或は手拭冠つて掃除するやうな所に、眞の活潑も優雅もあるのである。現今多くの女子の如く、自分のたしなみといふものがなく、只徒に男子の行爲をまねて、肩を怒らして濶歩するのを活潑と思つて居るやうでは、所詮仕方がない。

第十四章 賢婦楫取希子

一 希子さんと松陰先生

近來稀に見る賢婦故男爵楫取素彦室希子夫人は、長州萩の藩士杉常道の第二子、有名なる吉田松陰先生には妹である。幼きより孝悌にして婦道を守り、女らしい中にも事に當つて勇氣のあること男子も及び難かつた。幼い頃は、丁度兄の松陰先生が松下村塾といふ塾を開いて、子弟を教育せられ、後年、明治維新の皇謨を翼賛すべき幾多の英雄を生せしめつゝあつたが、希子さんは、當時家事にいそしみつゝ、喜んで其の講義を聞き、大に益する所あり、文章なども仲々巧妙であつた。

二 毎夜牢屋に食物を運ぶ

希子さんは十六歳の時、勤王の士楫取素彦さんに嫁ぎ、後、男子二人を生んだが、夫が江戸詰となつてからは、能く二子を教育して、毫も後顧の憂のないやうにして居た。頓て素彦さんが勤王の爲に入牢の身となつたので、希子さんは能く留守を守り、朝夕は二人の子供に、武士の心得など教へつゝ、毎夜風雪を侵して食物を運び、少しでも夫を慰めることに、努められたのであつた。

三 何事にも騒がず

慶應二年の夏、幕府が大舉して長州を征伐した時に、素彦さんは毛利侯の使として行つて、又も囚へられたので、親族は勿論、一番の人も驚き騒いだれども、希子さんだけは、兼ねての覺悟のことだからと云つて、落着き拂つて、徐に親族を勵まされたので、毛利侯は大に之を褒めたといふことである。

四 悪風俗教化に努力す

維新の初め、素彦さんは、參與などの役を勤めた後、山口を去つて大津郡二條久保村に移つた。此の時、希子さんは村民を勤めて、多くの田畑を開拓せしめ、遊民をして職に就かしめ、貧窮者を救ふなどのことをなされたが、田舎のこととて迷信も多く、悪い風俗もあるので、精神教育こそ大切であると、即ち小さな堂宇を建て、毎月布教師を招いて、眞宗と云ふ宗教の眞俗二諦の教理を諭されたので、村民は大に徳に懷き、教を聞いて段々風俗もよくなつた。

明治四年素彦さんは群馬縣令となつたが、此處は風俗が又一層悪く、強惡の者ありて、法度を犯す者が多く、縣治にも骨が折れたのである。希子さんは、大に之が匡正に努め、良人と共に、本派本願寺布教使小野島師を助け、非常に苦心して酬恩社教會を設立し、宗教の本義を弘めて、一般の人心を新にし、風俗の改良に努められた。

五 芽出たき往生

希子さんは、此のやうに、到る處法義を弘め、善い感化を及ぼされたが、明治十年四月中風症に罹り、同十一月胸膜炎を併發して、とうとう明治十四年一月亡くなられました。病中にも、良人の公務を妨げぬことに努められ、其の臨終の間際には手洗ひ口漱ぎ、髪を梳り、端座して親族知己の人々へ、厚く介抱の禮を陳べ、合掌して眠るが如く往生なされた。又希子さんは、最早起たぬと思はれた時、親に仕へ夫に仕ふる道は勿論、女の道を明にし、根據を佛教より擧して、丁寧親切を極めたる遺言狀を、細々と認められたのであつた。私は人と云ふものは、宗教の有難き信仰より來

らねば、人の道も真には行ひ難いものであるから、之を知つて、信仰の何宗であれ、これに準じて、胸に有難き信仰を蓄へなければならぬと思ふ。

其の遺言状

我真宗の法義は辱くも、全國無二の教法にして、我等如き愚昧の者にも、聞き開き易き他力本願に候へば、能く能く心を止め聴聞すれば、御慈悲にて候間、信心は頂かるゝと御示にて、自然と心中に御入満ち下さるゝ、他力不思議の御はたらしにて、凡夫の力をはげます、只我身の淺ましく拙く罪障深き事を思ひ知り、かかる機を助け玉ふ佛の廣大なる願力を疑なく信じ、罪も障も皆御佛に任せ奉りて往生の大事を安堵するばかりと聴聞申候。偕此の往生の大事を安堵せし上は、身をも心をも慎み、さす手引く手に氣を付け、國を思ふ心も厚く、家を治め夫を敬ふ心も深くなるやう、心懸くるが何よりの務めにて、極樂往生の土産こそ、凡夫自力の企に及ばざれば、自力疑心を離れ、佛智に信順して、他力に任せ奉るの外なけ

れども、信後の俗諦門は、成るたけ心を付けて嗜めよの御示と、兼て聴聞申居候。然れば此の世渡の俗諦門、祖師善智識の詠を誤らず、男は男、女は女の道を盡し人には眞實を以て交り、吝嗇慳貪の心なく、儉約質素を本として、萬事をつまやかにして、徒の費を省き、家の内を穩に治め、儉約と吝嗇との混雜せぬやう、媚び諂ひと眞實の謙遜とを見過らぬやうに心得べきことなり。殊に女は、粧を以て禮儀とするものなれば、度に外れ、分に過ぐることをも覺えざるものなり。されば身の拵へ、髪飾りも、餘り華美に過ぎざるやう、さりとして夫に對するに、餘り見苦しからぬやう、心附くべし。古の語にも豈膏沐なからんや、誰れを主として形造のみ華美に過ぐるにも及ばざるは勿論にて、垢つかぬやう、身なりを潔くするが第一と心得べし。されば朝毎に夫の起き出でぬ前に衣物を着更へ、帯など締め更へ、身仕舞潔くして、夫の目覺を待つべし。夫外に出づるときは、留守の間は、夫に代

り、何異となく氣を配り、不都合なきやう働くべし。凡そ人間の一生は、重荷を擔つて、遠旅するに同じきものぞと、古人も云はれ、長の旅路の其の内には天氣長閑に面白き景色を眺める日もあるべし。又は雨風雪霰難儀の旅路もあるものなり。假ひ如何なる苦勞あるとも、地獄の苦惱に比べれば、左のみ難儀とも思はれず、假ひ樂みあるとて、後に地獄に趣かば、其の樂は苦の因にて、後悔するとも返り難し。されば暫しの世の中は、心に叶はぬことあるとも、頓て極樂往生の樂を思へば苦にならず、國の爲めや、法の爲めや、家の爲め、夫の爲めなど、世に益あることをなすが此の世に滯留の仕事と心得、夫を樂みて勤むべきことなり。是れ誠に我國古今無二の有難き、眞宗眞俗二諦の教なりと、兼て聽聞申候。

抑々眞宗の祖師と崇めし御方は、何人と問ふに、賢くも尊き雲の上の御身にて、末代の我等を憐み思召し、榮耀榮華の御家を出でさせられ、彌陀の大悲を知らぬ身に知らせん爲とて、六百年の古へに、雪に堆れ、氷に閉ぢられ、一方ならぬ御苦勞

にて、斯る尊き教を弘め、其後代々の善知識も、寔に水の傳ふが如く、朝夕絶えぬ御勸化にて、日本國中端々迄行き渡るやう、御弘通下され、今の善知識迄雲上の祖師より、血脈連綿と御傳りにて、類稀なる有り難き御宗旨にて候ふに、其の有り難き程たる辨へず、斯る尊き御教の我

皇國にありながら、夫をば餘所事に捨て置きて、何の不足ありてか、此の頃世間の噂には、異國のあやしき教などに、靡く人もまゝある由、是れは畢竟、隣の味噌は酔い甘しと云ふ俗諺の如く、我が内にある米の飯を食へずして隣の焼芋を買喰するに同じければ、愚なる女の我等の眼にさへ、最と恥かしき心はえ哉と、淺間敷限りなく思はれ候。

夫につけても、我等は不思議の因縁にて、斯る有り難き御國に生れ、尊き御法を易々と聽聞致し、時も處も障りなく、誰れ憚らず念佛申し、佛恩の廣大なるを尊み我が身の仕合を喜ぶ身となりしは、此の上もなき幸と存候。是れ偏に佛祖善知識

の御恩は申す迄もなく、親や夫の恩恵と、返す返すも有り難く嬉しく候へば、國の爲め、家の爲め、親夫の爲めにも、格別に御恩報じの眞心を盡さずしては叶ふまじく存候。若も佛法禁制、眞宗差止の國にてもあらば、逆も聴聞することは叶ふまじく、又假ひ此の御法は弘り居るども、夫たる人の忌嫌ひて、聴聞するを許されずば、五障三従の女の身は思ふばかりにて、自由は出来ず、未來の大事は知りながら尊き御法はありと知りつゝ、心の儘に聴聞も出来ず、空しく惡趣に歸らんこと、如何ばかりか悲しきことならん。さすれば法義聴聞の心ある身は、國を思ひ、家を思ひ、夫を思ふ心も格別に厚うして、萬夫に逆はず、夫の機嫌を能く能く慰め家の内波風なく、内外の者よりも、懐かるゝやう心懸けなば、自ら夫の心も和ぎ、御法聴聞も美しく出来、終には家内残らず御法に入り、此の世限りの親みならず、未來永劫手に手を取つて、同じ樂を受くる身となること、此上もなき幸と存候。わけて女の若きときは、身持正しく品行を整へ、假初にも人の嫌疑を受けぬやう

心を附けて慎むべきことなり、又子供持ち候へば、男子女子とも十歳以下は、母の膝にあるものなれば、母の行儀染み付き、母の氣質に感ずること多し、殊更心を附けて心中恥しからぬやうに致すべきことなり。夫れに就いても、愈々第一御法を聴聞し、身も心も佛に任せ奉り、言ふも語るも皆御佛の御指揮に従ひ、立つも座るも御報謝の務めぞと心得、御稱名諸共に、萬の世話に立働くときは、佛の光明の中に棲む身故、自らやさしく、すなほなる心ばえとなるものなり。猶又前にも申し候やう、外國の教に靡く人の出来候も、此の御法の有り難き事を知らぬ故なれば、初めては早く、此の有り難き程を知らせまほしく候へば、品行行狀萬事美しく、人の感服するやうに、身を慎み候へば、自ら御法の光も顯れ、次第に惑を離して、御法に歸入することゝなるべし。左あらば、佛祖への御報謝は勿論、國の爲にも、如何ばかりか忠義となるべし。さこそ人をも助け、我が身も心易く、此の上の果報徳分は有之間敷候。

殊に御身達二人ながら、不思議の因縁にて我等と、親子の契を結び候こと、能く能く深き宿世の因縁と存候へば、吳々も此の因縁を徒事にせぬやう、いつ迄も永き樂を一處に結び度、我身は淺からぬ宿縁の顯れにて、他力の信心を決定し、此の世の心いたみなく、氣樂に一生を過し、頓て安養の往生を遂げ申す身となり、有り難き事、筆に盡し難し、最早此の節は、呼吸の息も促迫しければ、迎も來春迄永らへんことは、心元なく存じ候へば、父上の御恩萬分一も報い申さず、先立ち候は勿體なきことと、只夫のみ朝夕心苦しう候こと故、此の上は彌々兩人共仲好く睦じく申合され、父上に孝行頼入申候。又夫々夫を大切にし、貞節の道御盡し下され、末々の事迄頼入候。御念佛だに御忘れなくば、此等のみ自ら守らせ返す返すも、御念佛忘れなき様、偏に頼入候、あなかしこ。

尙々父上御召使の女中は、此の身に取りては、殊に因縁厚き者故、別して深に物事相談を盡し、家の世話被致候様頼置申候。

又書添進じ申候、信心獲得せば觸光柔軟の願益に依りて、言葉も柔かに、自ら心なき人も感ずるものぞと承申候。人の上に立つて下の者を使ふには、威に恐れて人に随ふやうにするよりも、徳に感じて有り難く思ひ、勤めるやうにするが肝要なり。猶おみすごのは、久阪家の母上に別して、孝道專一のことに存申候。

五 遺言の要旨

以上遺言の要旨たる、萬事の心懸を善くし、品行に氣を付け、夫の爲、親の爲、家の爲、國の爲、法の爲、盡さねばならぬ。儉約を努めて吝嗇を排け、謙遜を希つて諂諛を避け、能く子女や嫁や奉公人を教へ導き、虚榮に流れぬやうにするのである。此の如くしたならば、世間を心安く渡ることが出来る。假ひ徳義に富んでも、未來の安心が出来なかつたなら、目的なしの旅の如く、少しも安心がない、こゝに宗教信仰の必要が生ずる、順境にあつて、姑く安福を感ずるとも、逆境は時を擇ばず襲ひ來るから、常に能く修養して、之が覺醒をし、未來の光明安樂を望みつゝ、清く安かに

世渡りせんことこそ、希子さんの志望でありませう。

第十五章 心の掃除

一 先帝崩御と心の掃除

私は平日から、時々心の掃除をせねばならぬと云うて居るが、時々のみならず、毎日一遍心の掃除を爲し、且一年に一度は大清潔法を施行して、心の底から垢を掃ふのが修養上最も必要なことと思ふ。先年は有難い事には、大變な掃除をさして頂いた。夫れは何か云ふと、第一、明治天皇崩御の御事で、四十餘年間御恩澤に浴した我々が、崩御と承りて、實に心底から哀悼に堪へなんだ、所へ平日の御性行や御行爲、その他澤山の御聖徳を拜聞することが出来て、其の立派な御精神に恐れ入つた次第である。而して自分には非常な教訓を受けさせて頂いて、心の塵を掃ふことの出来た事であつた。

二 乃木將軍殉死の影響

夫れに引續き、乃木將軍が先帝陛下靈輦御發引の時刻に於て、立派な殉死を遂げられた。之に就いても平生知らなかつた將軍至誠の行爲を、詳しく聞くことが出来、其の性格の高潔、平生の行爲が至誠にして、而も慈愛あり、儉約であり、至つて義理の正しいことを聞いて、是れ亦非常な生きた教訓を與へられた。教訓として有難く受けたのみならず、之によつて心の底迄掃ひ上げられたやうな感じがしましたが、是れは我々のみならず、世間一般の人々も私と同じやうな感があつたと思ふ。何うぞお互に塵埃の餘り溜らぬやう、日々小清潔法を行つて、心の塵を掃うやうにしなければならぬ。

三 明治天皇御製歌留多

日本人の癖として、一旦感じた事も直き醒めて了ふ。前述の如き事柄が、何時迄も續けば結構であるが、早く時の經つに従ひ、元の木阿彌に返るといふのでは、甚だ殘

念であるから、何とかして之を持続せしめるやうに工夫したら宜からうと思ふ。之に就いて取敢へず、明治天皇の御恩澤を長く心に忘れぬやう、時々心の掃除をさして戴くと云ふには、御製中我々の修養になるものを、先づ一首引抽いて、其れで歌留多を作つたならば何うか、忘れかけた御恩澤を思ひ出す因縁になりはせぬかと思ふ。

四 至誠を傳ふる書

乃木將軍の如きも、長く一般國民の精神の中には残るとしても、長い間には忘れるといふ事もあるから、夫妻の性行並びに行爲上、我々の教訓になることを面白く書き綴つたものを、家庭の讀物として置いたならば、教訓上の益にもならうと思ふ。

五 學ぶ所何事ぞ

さて予は前述の通り、有難い教訓に與つたのであるが、明治天皇の御製も、乃木大將の行爲も、それ／＼が平々見る所の聖賢の教訓の上に現はれてあるより、外の事はないのである。自分は、さういふ教訓のある書を平日一體何と思つて讀んで居たのであ

らうか。さう考へると、實に慚愧に堪へない。文天祥の語に「讀聖賢書所學何事」とある。此の心持がなくて、唯文字や理窟だけ考へて讀んで居たものと見える。自身が出来ない、其れを現す事が出来ないとすると、さうどしか思へない。之も私一人であると云ひたいが、今日學問する人を眺めれば、まあ我々と同じやうな人間が多いらしい。そこで何ぞと云ふと、直ぐ理窟を云つて見なくなる。所謂科學的物質的に流れ、自身の事、精神の事を忘れ、總てを客觀的、研究的に見るやうになる。この點は餘程、學問を志す人に取つて考へなければならぬことと思ふ。

後篇

第一章 人世の謎の解

一 人世の三大疑問

誰でも、子供から大人になる時には、人生に對する諸種の疑問が起るものである。其の疑問の中には、簡單なるあり、複雑なるあり、大なるあり、小なるあり、逐一擧げることは出来ないが、其の中最も大なる疑問と云へば、人は死んだら何うなるか、運の好悪は如何、心とは何であるかと云ふ三つである。若しそんな疑問は起らないと云ふ人があるなら、その人は餘程の賢者か、非常な愚者であると思はねばならぬ。

二 死後の世界は如何

第一章 人世の謎の解

第一、死んで後は何なるかと云ふことは、己に野蠻未開の時代より、自ら懷抱され
た疑問で、實に千古の大問題である。其れが古代の人であれば、東洋でも西洋でも死
んでも靈魂は存在して、神の裁判を受け、善きは天堂に行き、悪しきは地獄に行くこ
云ふことになつて居るが、近世に至つては、肉體の外に靈魂はない、死んだら其れぎ
りである。所謂科學上から、さう云はれて居る。

以上二つの説は、何方が本當かと云ふに、古代の人の云へるやうに、死後の生活を
云々しても、古來生れ代つて出た人もなければ、明白に死後の生活を洩したるものな
い。然らば近世の人の云ふやうに、肉體の外に精神なく、死は即ち元子の離散に止る
かと云ふに、理屈は當にさうであるけれども、ごうも人間は、死んで跡方もないとは
信せられない。是れが定らねば、安心出來ぬとは、倍々困つたことである。

三 死より義務を盡せ

斯る疑問は四方より、毎日のやうに呈せられるのであるが、私を以て之を觀れば

死後のことは分りもしないが、分つた所で駄目である。其んなことを彼此考へるより
は生きて居る間に、自己の本務を守り、社會國家に貢献して、何時死んでも遺憾はな
いだけの事を残して、死んで行くのである。一口に云へば、人間の本務を盡せば良い
こととなる。凡そ人は社會協同生活の中には、初めて活かせることが出来る。全く持
つ持たれつする者なれば、互に誠意を以て人に盡すと同時に、前に生れた人の及ばぬ
所にまで手を届けて、國家子孫の幸福を計らなければならぬ。己に古來の世界の人
のお蔭で生存して居る以上、之に報いて、一層向上進歩した社會を造る義務がある。
而も人世は、實に天地間の旅をする宿屋の如きもので、己に人世の旅宿にある限りは
本務を盡すといふ自己の旅籠賃を拂ひさへすれば、何時死出の旅に出立しようど咎め
る人はないが、若し旅籠賃を拂はないで出發する時は、必ず其の筋の責苦を受けるこ
とは必定である。而して人は死んでも、其の事業の不滅なる事は、硯の水は乾いても
亦水蒸氣となつて下に落ちて來るやうに、全く不滅であるから、假ひどんな事業でも

世に残すと云ふことが肝心である。釋迦は三千年前に死せり、楠公は五百年前に死せりと雖も、其の今に活くるが如きは、肉體は消滅しても、事業は死なぬ爲である。然るに、お互の如き凡人であつては、さう大きな事業は残らぬけれども、善につけ悪につけ、語黙作々、何れも社會に影響を與へ、自然の裡に子孫に遺して行く。されば、人は勉めて怠らず、常に人世の向上進歩に貢献して、何時死んでも差支ないやうにするのが、即ち吾人の死に對する解決である。

四 人生は恰も芝居の如し

毎度申す如く、私は人生を一つの芝居たゞ考へて見たい。おぎやあと云ふ産聲に幕が開いて、それから盛衰浮沈は芝居の脚色、定業盡きて死んでしまへば、それで幕は閉るのである。此の生より死に至るまでの間には、英雄となり豪傑となり、或は成功、或は失敗、或は別れ、或は合ひ、様々の芝居を打つて、主となり従となり、親となり子となつて居るが、幕が閉つて樂屋に入れば、皆同じく役者の扮装、苦樂昇沈、

覺つて見れば假りの世の假りの姿、シエクスピヤと云ふ文豪は、人生は悉く之を夢の材料なりと云つて、其の材料を使つて巧な戯曲を作り出した様に、地水火風の同じ樂屋から人となつての五十年、幕を閉れば、又もとの地水火風の樂屋に返る。人生を芝居と見た喩は、餘程面白いと思ふから、時々之を用ゐることにする。

五 職業は何れも平等也

この吾人が、人間の本務を盡す上には、是非職業を持たなければならぬ。隨つて職業に貴賤はない。人の不爲になる事業の外は何れも、社會協同生活を助けつゝあることは、家に梁があり、床があり、柱があつて、立つて往くと同様である。男子と女子とが、互に持ちつ持たれつ、社會を造つて行くのは勿論のこと、どんな微細の職業でも、之を廢する時は、社會全體は明かに、その影響を受けなければならぬ。職業は何れも神聖なりとは、この理に基くものである。私はこゝに芝居を用ゐたいと思ふ。芝居と云ふものは、如何に上手な人でも一人では打てるものではないので、大

立物も要れば端役も要り、女形も要れば男形も要り、敵役になるものもなければ困るし、色男になるものもなければ困る。多くの役者が集つて、各々其の役は違つても、一つの筋書と云ふものに於て一致して初めて出来るので、我れは殺される役は嫌だとか、我れは何時でも威張つて居たいとか、各自勝手氣儘な事をやつては、其の芝居は滅茶苦茶になつてしまふ。各自が筋書の爲に忠實に、與へられたる役々を丁寧によつてこそ、其の芝居が面白いのである、何れの役も平等である。

六 社會的理解

或る役者が秘訣を語つた。自分が譽められやうと考へて芝居をしては、全體の仕組みを打ち壊して、終に自分の藝まで悪く云はれる、私は外の役者が演りよいよやうにやうにと考へて、全體の筋を活かす事に骨を折つたから、終に上の役者に見認められて、段々よい役がつくやうになつたと云つて居る。此の芝居の例は直に以て我々が世渡りの道を示すもので、自分自分の仕事を自分勝手のことと考へず、社會全體から考へ

て、持ちつ持たれつして、この全體をよくすると云ふ、社會的理解と云ふものがあつて初めて、世の中に立つ一人として立派に成功の途は開かれるのである。自分さへよければ、人は如何でも宜いなどの考は、外の役者の邪魔になることをして、終に全體を打ち壊すやうなもので、常に社會は共同生活なりとの考へを頭の中に置いて、各々其の與へられたる仕事を忠實に行ふこと、猶各々役が異なつても、共に一つの筋書に向つて忠實に技を演ずるやうにしてこそ、人たるの道は行はれるので、私はこれを社會的理解と名づける。此の社會的理解のない人間は、終に浮世の邪魔物となつて、排斥せらるゝこととなるのである。

七 自分の一生のみにあらず

さて然らば、其の浮世の芝居の脚色は、如何なるものであらうか、先きの譬喩に依れば、我々の生涯は、一幕一幕であるが、我々が死んだからとて、人生が終りになるものでもなければ、我々の生れたのが、人生の始めでもない。生の前には生あり、死

の後も亦死あり、我々の生れぬ前から、芝居を打つて居るので、我々が死んだからとて矢張、浮世の芝居は續いて居る。我等の一生は前の幕からの續きで、此の幕が閉つても、未だ續きの幕がある。其の幕から幕へと、何う展開して行くのが、浮世の筋書であらうか。これが難解しい言葉で云ふ人生の歸趣とか、宇宙の意匠とか云はるゝもので、宇宙は昔から今日まで何うなつて来たか、抑々亦人生は、昔から今日まで、何うなつて来たか、哲學、倫理、宗教上の大問題は此處にある。これを詳しく説明すれば、千萬言を費しても未だ足らぬが、一言にして云へば、浮世の芝居は同じことをやつて居るのではなく、昔から今まで始終變り通しに變つて来たと言ふことが出来る。變化は宇宙の大法、生滅は萬有の真相である。

八 理想は眞善美の實現

さて然らば、どう變つて来たか、悪くなつたか、善くなつたかと言へば、幾度も波瀾消長があつたが、大體の上から言へば、昔から段々面白くなつて、一幕一幕目出度

目出度の大團圓に近づいて来ると云ふことが出来る。大團圓とは何ぞ、人生の理想である。我等は理想として、眞善美の圓滿を要求して居る。昔と今と、何が多くの眞理が発見出来たか、學問の進歩は、眞理発見の範圍を廣くするので、如何に頑迷固陋の人でも、昔の方が今より、學問が進んで居たとは言はない。昔は神の住む所として、知ることの出来なかつた天界のことも、昔は知り難しと棄て、居た海底のことも、夫々に經驗と觀察との力で、漸次明かになつて来た。學問の進歩は何人も承認するけれど昔より今の善くなつたと云ふ道德上のことには、異論を唱へる人がないでもない。併し、人と人と相合へば、相争うて居た世の中が、共同生活となり、倫理道德が人生の一努力となつて来たことは、否定することが出来ない。唯昔の人が、無理解に服従して居たのが、今は理解せねば服従しなくなつたから、如何にも面倒くさくなつたやうであるが、大體の上から善くなりつゝあるのが、宇宙の意匠で、又善くするのが人生の任務である。更に昔と今と較べて便利となつたと云ふことは、何人も疑ふことは出

来ますまい。千里の道もてくく歩かなければならなかつたのが、汽車が出来、電車が出来、空には飛行機、水には潜航艇と種々な器械が發明され、僅に蠟燭の光で暗を照したものが、ランプとなり、瓦斯燈となり、電気となつたのである。此の善い方、便利の方へ變つて行くの進歩で、進歩は宇宙の意匠であり、浮世の芝居の大脚色である。幕から幕と變り來りし過去幾萬年、人類は絶えず進歩し、社會は常に發展して來たのであるから、我等の一生の芝居は、此の進歩を助けると云ふことを役目と心得て行かねばならぬ。斯やうにして、各々其の與へられたる仕事を一生懸命にして行きたへすれば、よし五十年七十年の一幕は、つまらなく終つても、次の幕には、立派になつて行けるのである。

九 樂は苦の種、苦は樂の種

幕から幕へと續いて行く連鎖は、原因結果の關係で、善因善果、惡因惡果の理法は前幕から後幕へと斷えず繋つて行く。これを三世因果の道理と云ふので、親の放蕩が

子の迷惑となり、親の勉強が子の幸福となるのは、家庭的につながる因果相續であるが、此の道理は生前死後だけではない。我等が一生の中にも、矢張此の譬喩を以て示すことが出来るので、若い時は序幕、中年は中幕、老年は大詰として見ても、序幕から苦勞したものが、大詰で樂になり、初めに樂をしたものが、後に困窮するのは、目の前に幾らも例はある。徳川家康は子供の時分から、今川氏に人質にやられたりなどして、苦勞に苦勞を重ね、長じてからの戦争も敗けてばかり居て、苦勞は斷えなかつた。關ヶ原の一戦に勝つて、終に天下を取つたが、もう餘程の老年であつた。小野の町は美人の名高きものであつたが、老いては卒都婆小町の衰へた有様となつた。「十五から酒を飲み出て今日の月」一代の中にも、因果の道理は明かに表れて居る。否、一代ばかりではない、一年の中にも、うかくと春の眺めに遊び暮して、年の暮に魔胡つき出すのも因果なれば、一日營々として樂に年を越せるのも因果、一日の中でも一月の中でも、是れ程明かなものはない。因果の道理のかく明かなるを知り、一瞬の間

も一時の間も、一日の間も一月の間も、これを心に思ひ浮べて、各々其の與へられたる仕事を眞面目に、忠實に働いて、一步一步向上進歩の大道を忘れなかつたならば、よし目前に苦ありとも、次第に消えて、樂果は目の前に展開して來るのである。

● 一〇 人の義務とは何ぞ

以上色々述べて見たが、要するに人の義務、人の行ふべき道は何ぞと云へば、むづかしく何々の、何々主義などと云はずに、次の三つの點を信じて、實踐躬行すれば宜いのである。乃ち吾人の死に對する解決法である。

- 一、何事も世の爲、人の爲と思つて、假りにも自分勝手心を出さず、社會全體の調和と云ふことを忘れぬこと。これを忘れねば同情となり、慈仁となり、禮讓となり、博愛となり、公德となる。
- 二、人々各々異なるも、其の與へられた仕事を、今までよりは善くしようと云ふ考は、進歩の母となり、成功の道は開かるるのであるから、全力を傾倒することを

忘れぬこと、これが忠實となり、勵精となり努力となり、勤勉となる。

三、深く因果の理を信じて、小事と雖も、忽にせざれば、苦にあつて慰安あり、樂にあつて反省あつて、人の行くべき道を踏み誤るの危険なく、こゝに信仰あり修養あつて、人生の大道を辿り行く事が出来る。

一一 所謂運命の開拓法

偕、第二の人の運の好悪は、如何と云ふ問題に移るが、同じ人間であつても、貴族富豪に生れて、浮世の辛酸を知らぬ人もあれば、貧賤に生れて、人生の快樂を知らぬと思はるゝ人もある。此の如きは、其の人の運命なりと、世に斷定せらるゝ所であつて、人力の如何ともすることの出來ぬや否やは、大に疑問である。成程富貴に生れ、貧賤に生れ、健康に生れ、不健康に生れるなど、先天的なもの、ほんの偶然のものであることは、あるが、さりとて、其ればかりでは、人間の運命は定まらぬ。美人に生れたが爲に、薄命な人もあれば、醜婦に生れたが爲に發奮する者もあり、金持に生れ

たが爲に、我儘が増長し、我儘が増長した爲に零落する者もあり、貧乏の家に生れたが爲に發奮し、發奮したが爲に出世するものもある。高位高官に生れなかつたならば平家の公達も壇の浦の藻屑と消ゆるには及ばなかつたであらうし、士百姓の子に生れなかつたなら、豊臣秀吉の成功も目立たなかつたかも知れぬ。人間には遺傳と云うて親譲りの氣質もあれば、境遇と云うて家庭の事情や周囲の状態が、直接間接に其の人に影響して、人々各々其の心持を異にし、従つて其の仕事の異つて居るのは、佛家の所謂宿世の業因、これに依つて此の世に出てからの役目が皆異なる、其の異なつた役を遣り損ふか活かすかは、其の人の技術、遣り損つて笑はれるのも、活かして譽められるも皆腕次第、運は天にありと雖も、之を開くは腕にありである。徳川家康の關ヶ原出陣に臨んで、或人西方塞がることを告げたりし時、西方塞がるが故に、我れ是れより行きて開くべしと云つたやうに、又ナポレオンの我を阻つるアルプスあらんやと、險山を切り開いて進んだやうに、能く奮勵努力、強い意志の力を以て、且最良の手段を

運び、自己の運命を開拓せねばならぬ。要するに、運は十中三四は天に在り、十中六七は人に在り、天に在るは言うて益なく、人に在るものは己れ之をなし、所謂人事を盡して天命を待つもの、新時代の所謂運命開拓法と信ずる。

一二 名優中村仲藏の話

昔、中村仲藏と云ふ役者に「假名手本忠臣藏」の芝居の斧定九郎と云ふ役が當つた。其の時分の定九郎は山岡頭布に襦袢を着てノソノソ出て来て、與一兵衛と云ふ老爺の金を盗み、鐵砲に打たれて死ぬと云ふつまらぬ役で、誰も演り手がなかつたのであるが、中村は何うか此の役を活かさうと、様々に工夫した結果、黒羽二重の紋付に朱鞘の大小、立派な浪人姿になつて之を演じたから、如何にも赤穂の浪人らしく、非常な喝采を博して、終に從來つまらぬ役にせられて居た定九郎の役は、立派な役者でなければ、さゝぬ役となつたと云ふ話である。

一三 豊臣秀吉の成功

黒田如水が曾て豊臣秀吉に、「閣下は尾張中村の土百姓の子と生れて、今日太閤さまで出世なすつたが、何か秘傳がありましたか」と問ふた時、秀吉は秘傳もないが、わしは何でも其の時にせねばならぬ役目を、一生懸命に働いた。草履取の昔には草履取の役を立派にしようとして、一生懸命に注意して、終に一番よい草履取となり、織田信長公の目に止つて足輕に上げられ、足輕となつては、一番よい足輕にならうとして終に士分に取立てられ、士として最も立派にならうと、一生懸命にやつて、終に上り上つて、今日の地位を得たのだと云つたと云ふことである。千里の道を行くものは先づ一步よりす、初めから眼ばかり高い所につけても、足が之に伴はなければ轉んで仕舞ふ。秀吉のこの心得は、世渡りの秘訣を最も明かに示したものと、見なければならぬ。

一四 眞我の發現を要す

心の活動に就いては、色々の説があるが、兎に角、我々には心があつて、身體を

司れることは事實である。已に心ある以上、最も能く之が活動を計らねばならぬ。然るに山中の賊は退治し易く、心中の賊は退治し難し。我が心で我が心を自由にすることの出来ないのは、實に遺憾の次第であるが、實際生活に當つて心の支配をするものは、即ち良心其の者である。良心は本心のこと、心の奥の主人公である。是れさへ確りして居るならば、少しも恐れることはないが、心の本體が確りして居ない爲に我等は徒に哀み、徒に怒り、徒に煩悶するのである。通常我れと思ふは如何。肉體を我れと思ひ、一家を我れと思ひ、一社會を我れと思ふので、實に小い我れである。全世界、全宇宙を我れとして活動すること、即ち眞我の發現であり、是れ所謂、良心、本心の活動である。此の心の本體を認むるのが、大切な精神修養の根抵であつて、人を怒り罵つた後に、あれは悪かつたと氣づき、あれは誤解であつたと氣づくもの、即ち本心である。昔近江聖人中江藤樹が、或大名の修養法を尋ぬるに答へて、「日日心の奥の主人に御目にかゝらるべく候」と云つたのも、亦此の道理である。

第二章 智慧と慈愛と勇氣

一 智慧と慈愛と勇氣

精神の上に就いては、支那に孔子、印度に釋迦、西洋に基督の教があるが、何れも申し合せたやうに、三つのことをせよと云つて居る。即ち智慧、慈愛、勇氣である。之を佛教即ち釋迦の教では、智慧、慈悲、勇猛と云ひ、儒教即ち孔子の教では、智仁勇と云ひ、基督教では、信、愛、望と云つて居るが、又我が國の神道に於ては、荒魂、奇魂、幸魂と呼んで居る。奇魂は智に當り、幸魂は仁に當り、荒魂は勇に當るのである。畏くも皇室に於かせられて、皇位繼承の御印となさせらるゝ御鏡、御玉、御劍は智仁勇に形ざらせ給うたもので、古來の神儒佛道、新來の基督教と共に等しく此の三つの心の作用を、程好く行ふことに努めて居る。

二 智慧には學問を要す

智慧は、物を知ること、當然のことを當然に知ることである。斯やうなことは、いまでもないやうにも考へられるが、それが仲々出来ないで困る。伊豆の大島の人、飛弾山中の旅館に宿し、偶々飛弾の人の、月は山より出で、山に入ると言ふのを遮り、そんな馬鹿なことはない、月は海より出で、海に入ると言つたので、こゝに兩人の爭論となつた。各幼年以來の實驗を證據に取つて、互に下らない。果は古書の聞き噓りまで、引出して、月は西山より出で、東山に没するのではないかと云へば、一方では、否、月は東海より顯はれて西海に没すところではないかと、負けず劣らずの喧嘩に、東京生れの旅館の小僧が仲裁に出で、お兩人とも、それは飛んでもない間違です。月は確に、屋根より出で、屋根に入る、これを本當ですと言つたさうである。これは一場の笑話に過ぎないが、此の内に眞理が含まれて居るのである。自己の心中では、正直で確に間違ない證據があると思つたことでも、時々飛んでもない誤解が生ずる事があるものである。それは見聞が狭く、學問がない爲である。自己の見聞狭く、學問

の浅いのは、己むを得ないとしても、心して知識を廣くするやうに努めなければならぬ。

三 學問を悪用する勿れ

されど、智慧に大切な學問も、之を悪用しては、却つて害になる。所謂邪智では仕方がない。昔希臘に料理人があつて、某家に雇はれて居たが、窃に鷺の片足を喰つて仕舞つた。主人は之を發見して責めた。所が料理人曰く、鷺は元來片足のものであります。主人曰く、否々さうではない。お前の仕業であらう。料理人曰く、さうではありませんと、何處迄もしらを切るので、主人は、さう強情を云ふのなら、野に出で、二足か一足か實見しよう、強ひて引張り出した。頓て鷺の飛行するを見つけたに、何故か片足ばかり見えない。鷺は性來、片足を縮めて飛び歩くからである。料理人は、それ御覽なさい。主人は、馬鹿を云へ、あれは見えないのだと、鷺に向つて大喝一聲したるに、鷺は驚いて片足をも現はした。それ見よ先刻の鷺の片足は、お前が喰べた

に違ひない、けしからぬ。料理人頓に應へて曰く、それは貴下が卓上の鷺に向つても大聲を發せられたなら、他の一足も出たものをと、到頭胡摩化して仕舞つたさうである。この如きは、理屈で胡摩化したのであつて、假ひ學問をしても理屈を知つても、之を悪く使つては、有害無益である。

四 感情の力と家事經濟

人間は毎日死に近づきつゝある。ロングフエローは、呼吸は墓場へ行く進軍の曲であると云つた。考へて見れば、如何にもさうであるが、それがさう思はれぬのは、感情があるからである。酒を飲むのは悪いことだと知つて居ても、何となく止められぬのは、酒はおいしいと云ふ感情がある爲に、それを實行することが出来ない。甲の家では毎月收支が償はないと聞いて、乙が儉約せよと云つたが、さうは出来ないと云ふ。そこで、乙が又云ふには、こんな呪をなさい。井戸端に出て、底の抜けた桶に水を注ぎなさいとのこと。甲は正直にも、朝から晩まで實行して見たが、少しも溜らない。

そこで甲は乙に此の事を報告した所が、それなら今度は、底のない釣瓶を以て、底のある桶に水を注ぎなさいと云ふ。甲は馬鹿馬鹿しいとは思つたが、再びこの命令通り行つた所、初めは前日のやうに、水は溜るよしもなかつたが、十杯二十杯百杯二百杯と繰返す中に、一雫づゝ次第に溜つて、夕方には、其の桶に一杯になつたさうです。そこで乙にこの話をする、それで能く合點しなさい。家事經濟は儲けるのも大切だが、始末をすること、儉約をすることこそ大切である。主人は少々のおろくとも、主婦さへ確りして居るならば、家の經濟は維持されて往くものであるとのことであつた。

五-財欲

次に人間には、財欲、名譽欲、骨惜、男女の關係、食欲などの五つの欲情があつて、之が爲に道理をくらし、智慧も出で、慈愛も行へないやうな事が起つて來る。佛教では、誰でも持つて居る欲を五欲と云ふ。その第一が、財欲である。財欲とは、外の物を自分の物にしたい、金が欲しいと云ふ欲であつて、女が呉服店に行けば、何

となく呉服物が欲しい、男が本を欲しい書物が欲しいと云ふのは、此の欲ある爲である。がそんなら直ぐ着る、直ぐ讀むかと云へば、さう着もしない、讀みもしない、唯何でも欲しいと思ふのである。こんな欲のある爲に、自然無駄なものを買ひ、贅澤もするど云ふやうになるのである。

六-名譽欲

第二の名譽欲とは、何でも褒めて貰ひたい、男ならば、骨を折る車夫の賃金は根切つても、料理屋の女中には、請求もせぬのに金を遣る、女ならば、奴婢の給料を減じても交際社會に花を飾らうとするなどは、名譽欲があるからで、この虚榮の爲には、身心を損じ、人を害することがしばしばある。

先年金原明善翁が、屬官を伴つて旅行をした時、屬官の五厘の釣銭を取らなかつたのを責め、強ひて後返をさせて取らせながら、六十銭の俸賃を十銭増して七十銭遣つたと云ふことであるが、物事は凡て虚飾名聞の爲にしてはならぬ。仁義道德の爲にす

べきである。名譽は實に大切なもので、紳士淑女として、之を尙ばねばならぬことは勿論であるが、善事善行をして、自ら名譽を得るやうにしなければならぬ。

七 他の三つの欲

第三、骨惜、安逸の欲、成るべく樂をしたくと云ふ欲、第四、男女の關係、夫婦の間にも慎まねばならぬことである、第五、飲食の欲などで、此等の諸々の欲がある爲に、時々道理が眩まされる。搦尾の明恵上人は、人はあるべきやうであれと云はれて居る。男は男であるべきやう、女は女であるべきやうで夫は夫、妻は妻であるべきやう、親は親、子は子であるべきやう、當然の道理を守るのである。

八 仁愛同情

仁はなさけ、思遣のことである。思遣即ち同情の心は、どんな人でも感せしむることが出来るものである。己れの欲せざる所は、人に施す勿れで、例へば下女の歸宅が遅かつても、お前案じて居たと云へば、先から折れて謝罪するが、いきなり叱言

を云つては、駄目である。叱つた後に褒めるより、褒めた後叱つた方がよい。人はお互に仁の心を以て、同情し合はねば、一日も立つて行くことは出来ないものである。

九 勇氣もて感情を制せよ

女は小さいことには氣がつくが、大體のこと、大切なことを忘れ勝ちで、良人の留守に訪問客があつても、其の用事の要領を問はずして、却て其の人の袴がどうとか、洋服がどうとかいふことに氣がつく。併し此の小さい事に氣がつく、物事に綿密であるといふ所が、男の及ばぬ所であるから其の長所を發揮せねばならぬが、兼て大事を忘れる、大體を疎にするといふことをしないやうにせねばならぬ。而も細いことに頓着し感情に搦まれる爲に、言ふべきこともよう言はない、行ふべきことも行ふことが出来ぬ、忍耐が出来ぬ、勉強すべきに、勉強が出来ぬといふことになる。それは意志が弱いからである。勇氣が乏しいからである。假ひ人には、智慧あり仁義ありとも、勇氣がなくては、何事も出来ない。又古より一朝の怒に其の身を忘れるといふことが

あり、少しのことが辛抱しきれなかつた爲に、大事を惹起した事が非常に多い。何事も最初が肝心であるから、女らしい中にも凛乎たる勇氣を以て事に當り、正しい事を外すことのないやうにせねばならない。

第三章 言葉に就て

一 言行一致を要す

信と書き、誠と書き、何れもまことと讀むが、信は人間の言葉で、虚偽がないこと、誠とは云ふ通り事を成すことで、二つながら言行一致を標榜した字である。乃ち人間は誰しもまことでなければならぬといふのは、直に言行一致なれと云ふことで、言葉の軽々しくはならぬことは、これを以ても分るのである。

二 言葉の歴史の二つ

言葉の起原は、極簡單なもので、その原始時代に遡るときは、單に嬉しいとか、

哀しいとか、欲しいとか、憎いとか、熱いとか、寒いとかと云ふ感情を表したもので、犬猫に比し稍高尚複雑であつた位のものであつた。例へば水に手をつけると爪が痛い、そこでつめたいと云ふ語が出来ると至つた。所が言葉も、人智の進歩すると共に、次第に古いものは枯れて、新しいのが繁つて來、昔、わとか、われとか云つたのは今や僕とか私とかと云ふやうになつたのである。

三 物は言ひ様に依る

人と人との間は、言葉に依つて繋がれ、世の中が立つて行く以上、どう云ふ言葉が善いか悪いか研究しなければならぬ。同じ女中を叱つても、お前は能く働いて嬉しいが、たい居睡り丈が悪いと、同情を込めて言へば、成程と言ふことを肯くが、之と反對に口荒く、お前居睡りをして駄目だと叱りつけた上で、お前は能く働くと云ふのでは、叱言の効力は少い。

四 分り易く品よかれ

借言葉は、思想感情を人に傳へるものであるから、第一、それは平易でなければならぬ。例へば、田舎ひよつと出の女中に向つて、難しい都言葉を使つたり、無學の者に漢語、ハイカラ語を使つてはならない。さればと云つて、言葉と云ふものは、餘り分り易く云ふと品が悪くなる、例へば、尾籠の言葉を露出しに言ふと、甚だ面白くない計でなく、貴人長上に向つてこんな言葉を遣ふと、禮を失するやうな場合がある。お銚子と云へば迂潤だといつて、酒とか正宗とか云ふのは、場所柄によつては、大に慎まねばならぬことである。

五 正確なるを要す

なほ言葉は正確であつて、紛らはしくはならぬ。例へば二三日ささといふ言葉は二三日前か後か紛はしい時があり、降りさうな天氣でないでもないと言ふ言葉は降りさうなと切れば、雨天とも解される。或商人がセキタンサンヒヤクエンカヒオケと電報をかけたなら、石炭三百圓の積りであつたのを、石炭酸百圓買つて置いたといふ話が

ある。昔の葉書の「此の表面には宿所姓名を限り認むべし」も紛らはしい文句であつた。殊に婦人は品格あつて、行届いた言葉を使はなければならぬものである、人々は、言葉は人格の進りであること、言葉の借り着は出来ぬことを忘れてはならぬ。

六 周到なることを要す

次に物言ひは行届いて居なければならぬ。言はなくても善いことを言つて、人の感情を害し、自己を害ふものがある。又言ふべきことを言ふべき時に言はないで、後になつて困ることがある。口數が多かつたり、輕受合をして困ることがある。例へば主人が「金が餘計にいるが如何したのだ」と云はれて、出来もせぬのに、はい仰せの通りに致します、などと云つては、後で困るやうになる。殊に女は感情に激し易いものであるから、注意せねばならぬ。

御製に

そこひなき、淵やはさわぐ、山川の

あさきせにこそ、仇波は立て
物言ふ時は、注意しなければならぬ。

七 一に不妄語戒なり

以上述べたやうに、言葉は平易にして品格あり、正確にして周到なることを要するが、我が佛教に於ても不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語の四戒を、十戒の中に加へて居る。

佛陀の戒めの言葉の中でも、虚偽を云ふことの悪いのは、三歳の童子と雖も、之を知る。隠れたるより顯なるはなしで、妄語ほど自分を苦しめ、人を苦しめるものはない。印刷局の女工が蝦茶の袴を穿いて本をたばさむが如き、下女が奥様の真似をするが如き、口には云はねど妄語の一つで、虚榮の初りである。正直は成功の直路なりで妄語を以て平和幸福を得ることは到底出来ない。

八 二に不兩舌戒なり

不兩舌とは、別に妄語を云ふのでもなく、惡口を云ふのでもないが、甲の人にも好い加減な陰口を云ひ、乙の人にも好い加減なことを云つて、人と人との仲を割く言葉のことで、所謂二枚舌を遣ふことである。こんなことで、どうして人と交際出来よう。一身も一家一團體も安全に行く筈はない。

九 三に不惡口戒なり

不惡口戒とは、人の惡さを云はぬことである。人の陰口は、善惡兩つながら言はぬ方が好いが、人と云ふものは、兎角人の惡口を云ひたがる、缺點短所を評したがるものである。殊に婦人は、話題に乏しい所から、あの奥様は此うだとか、彼處のお嬢様は何うだとか云ひ勝ちである。それを甲より乙、乙より丙、丙より丁と云ふ具合に傳へて、大喧嘩にならない迄も、互に信用を害し、心持を悪くすることがよくある。昔より口は禍の門と、お互の口を誠めて居る。

一〇 四に不綺語戒なり

不綺語戒とは、言語に綾を着けて語らぬことである。それは、人の感情を損ふことは良くないが、一寸のことを一尺と云ひ、ありもしないことを、言葉のはづみであつたやうに云ふ、爲にならぬ戯談諧謔を云ふことで、別に邪氣はなくとも、人を害し、自らを害ふことがある。

一一 言葉は愛語こそ

然らば、言葉はどうすれば好いかと云ふに、佛教では、愛語を遣へと云つてゐる。愛語とは母が子に對する言葉のやうな、慈愛の籠つた言葉を遣ふことで、斯やうな同情に富める言葉を以て、部下にでも、雇人にでも對したならば、決して其の反抗を受けることはない。佛教にも「愛語能く回轉の力あり」と云つてゐる。昔豊臣秀吉の未だ下士であつた頃、辛うじて二三人の男を使つて居た。所が一人の者は餘り微祿なのに愛語をつかして「どうぞ暇を下さい」と云つた。秀吉は悪びれもせず「私のやうなものに、今まで能く辛抱して仕へてくれた。私は御承知の有様で、お前に報いること

も出来ないが、明日は茶の湯、饗應で、寸志を表はしたいと思ふ。どうか今日一日待つてくれ、尙お前が人に仕へて萬々一にも面白くないことがあつたならば、何時でも歸つて来て呉れ。お前さへ嫌でなければ、私の方は構はない」と云つたところ、その家來は感泣して、自らの輕卒を謝し、永く仕へたと云ふことである。これが即ち愛語の力である。

一二 言行忠信、表裏相應

言語に裏表のあるのは良くない。尤も表は表らしく、裏は裏らしくせねばならぬが表と裏とが衝突するやうでは困る。玄關は奇麗でも、臺所が汚くてはならぬやうに、面と對つて褒め、退いて誹るなどは、甚だ善くない。人は須く、言行忠信、表裏相應であるべきである。

第四章 菜根譚の修養

一 悪中の善と善中の悪

菜根譚と云ふ本にある、二三の修養談を致したいと思ふ。

「菜根譚」の一節に、「悪を爲して人の知るを畏るゝは、悪中猶ほ善あり。善を爲して人の知るを急にすることは、善處即ち是れ悪根なり」と云ふ句がある。悪いことをして、人がそれを知るのを畏れる者は、悪いことをしながら、是れは悪いことである、人に知られてはならぬと云ふ羞恥の心があるから、一道の光明が猶ほ輝くものありと云はねばならないが、善をなして、早く人に知られたい。今自分が斯う云ふ善をして居るのを、何故人が知らぬのであらうと云ふやうに考へるならば、それは人に誇らんとする野心があるのであるから、眞の善でなくして、其の心根は、寧ろ厭ふべきものである。善を装ふのは偽善であつて、此の偽善は、悪の根本となるものであるから、

そんな人には見込がないと云ふので、世の偽善を誡める鐵槌である。

二 逆境も順に受ける

又「天の機械は測られず、抑へて伸べ、伸べて抑ふ。皆是れ英雄を翻弄し、豪傑を顛倒する處、君子は只是れ逆に來る處を順に受け、安きに居て危きを思ふ、天も亦其の技倆を用ゐる所なし」とある。目には見えぬが、天の神様の機械と云ふものは、却々巧妙に出來て居て、人間の智慧は推し測ることは出來ない。之を人の一生に就いて云ふも、或時は抑へて悲境に陥らすかと思へば、或時は伸べて得意の境にあらしめ、伸べては抑へ、抑へては伸べ、此の伸べたり抑へたりする機械が、皆是れ英雄をも玩具のやうに弄び、豪傑をも七顛八倒せしめるのである。試に古來の英雄の事蹟を見れば、彼のナポレオンが佛蘭西皇帝の位に上り、歐洲各國に號令した時などは、即ち最も伸べられた時で、遂にセントヘレナの孤島に幽囚の身となつた時は、即ち最も抑へられた時である。豊太閤が草履取の時より、更に關白になつた時代、一代を通觀

して見れば、英豪傑の事蹟には、必ず此の天の機械に伸べられ、抑へられ、翻弄せられ、顛倒せられて居ることが多い、天の機械は此の如きものであるが、修養のある人は、逆に來る所の天の機械も之れを順に受けて、逆境が參つても、之を順境とし、順境の安樂な時に居つて、逆境の危き時を思ふ、と云ふ風に、遠く慮るが故に、近い憂ひもなく、治つて居る時も、亂れると云ふことを忘れないから、危いことはない。このやうに應用自在にして行つたならば、どんな悪い神も不思議の手段を施すことは出來ないから、人間は常に、自由の天地に遊ぶことが出来るのである。

三 成功者と失敗者

又一節に「燥性の者は火熾、物に遇へば即ち焚く、寡恩の者は氷清、物に遇へば必ず殺す、凝滞固執の者は、死水腐木の如し、生機已に絶ゆ、俱に功業を建て、福祉を延べ難し」とある。人間にも色々あるが、第一に燥性と云つて、性急で氣儘の人、かう云ふ人は火のやうなもので、物に遇へば、悉く燃ゆるが如く熾んであるから、出遇ふ

者は、必ず悉く焚いてしまふ。斯う云ふ風の人には功業を建てることは出來ない。次に寡恩と云つて、人に恩恵を施すことの寡い者である。こんな人は、氷清と云つて氷の如く冷かで、動もすれば冷酷に流れ易く、出遇ふ人を何れも氷殺してしまふ。斯うな人も、亦成功することは出來ない。次に凝滞固執と云つて氣象が凝り滞つて、動きの取れない人は、これは恰も死水とて流れぬ水、腐木と云つて腐つた古木のやうなもので、生々の機が已に絶えて居る人であるから、是れも功業を建て、福祉を延べて幸福なる人となることは出來ない。されば人が何か事をなさんとするには、以上三種の人を避けて、性急でなく、冷酷でなく、頑固でない人と共にせねばならぬと、相手を選ぶ上の訓言である。

第五章 國民的 信念

一 現代の迷信は是れ

憶起す、當年笈を負うて東上した時、紅顔の美少年であつた自分も、鬢髮既に兩三點の霜を加へた。併し社會は、より以上の變り方である。殊に著しきは思想方面の變遷で、今や天下は滔々として個人思想に傾き、國家的觀念は日々薄らぎつゝある。是れ一は外來思想の影響にもよるべく、又日常生活の壓迫にも基因するであらう。兎に角明治初年の學生は、口を開けば即ち天下國家の事を談じた。今は概ね然らざるを觀る。されど其の何れが是で何れが否なるかの論は暫く措き、日本人は常に西洋人の後塵を拜し、西洋輸入の時代後れの思想を何時も、奉じて居るかの如く思はれる。何となれば、現今日本に於て見る個人思想なるものは、焉んぞ知らん、西洋に於ては十八世紀より十九世紀に亘つて行はれつゝあつたもので、これによつて觀ても日本の思想が西洋に比して餘程遅れて居ると云ふことは明瞭である。近時頻りに喧傳されつゝあるマルクスにしても亦然り。更にイブセンの劇曲『ノラ』の如きは、明治十一年に我國に傳へられて居たものである。如斯如何なるものにせよ、外國語で書いてあれば、直に新

しいものとして珍重されると云ふ迷信を、現代人はもつてゐるかの如く想はれる。

二 共同の精神と力の充實

世界各國の何れを問はず、凡そ其國家が進化發展し、以て富強を致すには、大略二つの原因がある。一には共同の精神、二には力の充實、これである。最近の大戦に於て、初め獨逸の勝利を得つゝあつた所以は、即ち協同の精神と力の充實により、其の反對に當初聯合國の勢力のしかく振はなかつたものは、其の協同の點が充分でなかつた爲である。然るに大戦の終りに至つて、彼我形勢の一變せしものは他なし。獨逸側は右の二點の缺乏せるに反し、聯合國には、却つてこれが實行されて來た爲である。而して、この協同には、横の協同と縦の協同とがある。國際聯盟の如きは、即ち横の協同と言ふべく、縦の協同とは國內の協同で、即ち政治家、官吏、資本家は勿論、今日は勞働者も協同一致せねばならぬ事となつた。蓋し國際聯盟なるものは世界的で力の協同であるが故に、力無き國家は、遂に世界の落伍者となるのは勿論である。獨

逸の軍國主義も、人口に對して必要なる食物と、其の食物を得べき土地とを獲得せんとするにあつた如く、食糧の問題は、甚だ重大である。彼の英國の如きは、本國の全人口を僅か十週間支へるに足る食糧しか、自國に於て産し得ぬ。残りの二百何十日間全國民を養ふべき食物は、勢ひ他より仰がねばならぬ。從つて移民問題等も、看過すべからざるは勿論、近時又食物分配の不公平を叫び、資本家對労働者の争闘も盛んになり、階級戦なるものは、頗る世界的となりつゝある。これ現代の社會組織の不完全なる點にも基因すべけれども、一面には、近代人の國家的觀念が非常に稀薄となりつつある爲と思はる。即ち、すべての自己本位の個人主義に傾き、吾國の如きも、吾は日本人なりとの國民的信念を缺如せるが故に、世界の他の國々に於て行はるゝ事は、何事によらず、直ちに日本國に於ても行はれ得るかに思惟せる者が多い。今の青年にも吾は人なり、己は己也との考へにて、國民的信念無きものゝ多いのは、是蓋し近代人の通弊である。

更に現代にも保守的思想の一派がある。彼等は唯現代を呪ひ、時弊を痛嘆して曰く、須らく日本建國の初に復るべしと、是亦何等の寢言ぞ。蓋し夫れ開國當初の狀に復古して可なりとせば、吾等の祖先が繼承し來れる二千有餘年間の文化事業は徒勞に歸すと云はねばならぬ。斯かる事のあるべき理なし。今尙斯かる言を爲す、是れ之れを頑迷固陋の危険思想と名づくべきか。以上の二者は、俱に健全なる思想ではない。

三 大正の日本人たる信念

危険なる新思想、固陋なる危険思想、共に執る可からずとせば、吾等は如何なる思想によるべきか。他なし、吾等は大正時代の日本人なりとの信念を必要とするのである。而してこの觀念に基いて、吾々國民は如何に爲し來つたか、又現在如何に爲すべきか、この研究をするが、當面の問題である。

抑々思想考察の法に二方面がある、一は即ち境遇年齢教育等によつて移り變る考へで、少年時代と壯年時代とは自ら思想の異なるが如きを言ふ。これは個人の場合なれ

國家を中心として言ふ場合には、この推移する部分を時代精神と名づける。故に時代精神なるものは、徳川時代と明治及び大正時代とでは、各々異なるものがあるべきは當然である。次には、一定不變の部分で、恰も人間の人格に、自我の根本的統一性あるが如く、國民にも、自ら一定不變の統一ある根本思想があるべきで、この方面を國民精神と名づける。

由來日本の國體は、萬世一系開國以來不變で、而も、其の國體の基礎は、國民血統の中心であり、且つ政體は時代に依り、時に變遷はあつたが、政體の中心は、建國の初めより皇室を離れた事は無い。この三つの中心點が一致する所、全く萬國無比である。故に他國の如く、政體の變動につれて、國體を變遷すること無し。且つ憲法發布以前も今も、政體の中心は別に移動してゐない。全く「神隨」の國である。抑々神隨と云ふ事は、建國の古に復ることではなく、「自然」と言ふ事である。今吾等が萬世一系の皇室を崇敬するは、直に血統中心、祖先を崇敬すると言ふ、極めて人間の自然

性に基づけるもので、其の間に何等の義務的、干渉的の意味は無いのである。この血統の中心、即ち政體の中心といふ根本思想に基づける國民精神なるが故に、儒教を輸入するも、佛敎の傳來あるも、よくこれを咀嚼醇化して二千五百年來、その自主的選択を誤らなかつたのである。凡そ吾等が食事をなすに當つては、自己の健康を標準として或物は採り、或物は、之を捨つるが如く、我が國民も、外來思想に對して、即ち、之を爲し來つたのである。

四 自主的選擇の妙味

次に考ふべきは、當 儒教なり佛敎なりが、我國に渡來した状態である。この所謂外來思想なるものは、決して一般民衆の手に輸入したのでなく、先づ當時の支配階級の手に渡つて來たと云ふは面白い現象で、當時の政治家が、日本の國民精神を基礎として、取捨選擇し、以て一般に行はせた。血統の中心に對する孝の觀念と、政體の中心に關する忠の觀念との一致する我國に、伯夷叔齊の思想の及ぼした影響は重大であつ

た。即ち周の武王が殷の紂王を討たんとする門出に其の馬を控へ、假ひ暴君たりとも臣として君を討つ不可を極諫し、用ゐられずして首陽山に隠れた。あの決死の精神が如何に吾が國民性に影響したであらう。上は仁徳天皇が、先帝の儲貳たりし稚郎子と皇位を相譲り合ひ、互に登祚を謙拒せられる美譽となり、下は道鏡が専横無道に對する清麿の忠節となつた。これ亦伯夷叔齊の思想の影響と言へやう。

尙徳川時代の學者中には、孔子の眞精神は萬世一系の皇室を頂ぐにあつた事を、孔子の著書を引例して説明してゐる、誠にさもあるべし。不幸武王の周の國を奪ふ事あつて孔子の意は貫徹しなかつたが、若し伯夷叔齊なかりせば、更に多くの逆臣を出したであらう。兎に角儒教の思想が、日本化させられたるは、事實である。次に面白きは彼の民本思想の孟子が、我國に用ゐられ讀まれなかつたことである。此の書を積んだ船は、常に風波の難に遭ひ、満足に輸入さるゝ事難かつた話は、諸書に見える。假へ民間には讀まれたりと雖も、朝廷の公式には孟子の披講は更に無かつた、取るべきは採

り、採るべからざるものは、即ち熨斗付きの儘本國に返還した所に、我國民の自主的選擇の妙味がある、それがあらぬか、この危険思想を返却された本國の支那に於ては、今以て革命動亂の絶え間が無い。

五 佛敎の影響と國民性

次に佛敎の我が國民性に及ぼした影響として擧ぐべきは、慈悲と報恩の思想である。今日では社會事業と言へば、歐米文化の賜物の如く思はるれど、焉ぞ知らん、吾等の先蹤は、悉く既に爲し得て居た事のみである。そして聖徳太子の社會的事業を初めとし、歴朝の皇室及び其の關係者によつて創設された悲田院施藥院等の事業は、吾國慈善史の劈頭を飾るものであり。續いて盲人教育、監獄布教さへ行はれて居た。斯く當時の佛敎は、國家鎮護の目的よりして、日本の感化救濟事業を振興した。佛敎の慈悲仁愛の思想が現實に生きて働いて居た好適例である。故に國家鎮護の大目的と一致する教理をもつ佛敎は、生きた現實的の宗教である。

抑々慈悲報恩の觀念が、國民精神の根本と爲り得るかと言へば、上は慈悲を以て下に臨み、下は上に向つて報恩の念を以て對するので、其間に義務とか權利とかの思想は決して無く、國民と皇室とは親子の關係なるが故に、政體は時代によつて變れど、政權の中心は、決して皇室を離れなかつた。例へば、源頼朝が幕府を鎌倉に開きしも、上は皇室の信任を得、下民衆の心を得て、僅かに責任内閣を組織したと言ふに過ぎぬ。それは頼朝自ら六十餘州の總追捕使と言つて居たのを見ても明かである。故に上天皇の信任をも蒙らず、下民の心を失ふの時に至れば、何時も政權は他に移つて仕舞ふ。頼朝に次で偶々北條氏、民心を得て政務を執ると雖も、民の心離反すれば、忽ち足利氏がこれに代つて、北條氏は殞れた。足利氏は十三代の天下を保つたが、是亦遂に權を失ひ、天下は麻の如く亂れて、戰國の世と成つた。この戰國の世を一統して天下を太平にした者は何人ぞ、或は言ふであらう、即ち織田氏力なり、豊臣氏の功なりと。されど記せよ、信長秀吉如何に偉なりしと雖も、上皇室の御稜威を頂く事無

かりせば、奚ぞ能く斯くの如く、速に太平を致す事を得ん。徳川氏は大に茲に鑑みる所あつて、其の天下を保つや、先づ天下の封二千八百九十九萬石中、二千萬石を國內大名に分轄領有せしめ、残り八百十九萬石は、禁裡修築造營の御料として、將軍家の直轄すべき由を宣布して、皇室尊崇の意を明かにし、勤王の實を天下に示した。斯かる開府當時の觀念も、何時か等閑に附せらるゝに至るや、民心漸く徳川氏を去り、終には國論沸騰し、尊皇の志士蹶起し、大政をして奉還せしむるの止む無きに至らしめた。是に由つて之を觀れば、政權の中心が古來一貫して、皇室に在つた事が窺はれるのである。

六 皇室、理と情との合一

又御歴代の皇室は、常に人民中心の政治を行はせられた事を記憶せねばならぬ。今日の語を借りて申せば、民本主義の政治である。關族蘇我氏を斃して、民本的新政を行はれたのが、大化の改新であり、階級制度と幕府專制政治を打破して、四民平等皇

室中心の政に復されたのが、明治維新である。

而も皇室と人民とは、政治上治者被治者の位置にありと雖も、血統の中心なる皇室と吾等とは、即ち親子の關係である。故に義は君臣、情は親子である。然るに今日の人はこの崇敬すべき由來と、我が國民性の根本精神とを忘れ、妄りに外學思想の前に頼るのは、愚の極である。

青年と老人、新思想家と保守黨との間の墻壁は、容易に除かれぬ。而して近代人は理智に偏するを弊とし、固陋の徒は、情に傾くを以て缺點とする。而も相互の間に、同情と理解とを缺ける憾みがある。故に老人は人倫五常の道も、治國平天下の法も、情を以て解決せんとするが、西歐思想の影響を受けた近代人は、到底かゝる事で満足する道理がない。何事も理智一片を以て説明せんとし、すべての因習を打破し、習慣を拒避せんとする。共に是れ完全の思想では無い。若し世間が仁情のみを以て渡り得るなら、借金に行つても、決して拒絶さるゝ事は無く、又此の社會が理智のみで片付

くならば、アルコールの害を知れる者は、再び酒を口にすべき筈なけれど、事實は然らず。されば、智と情が合一せねばならぬ。凡そ宗教的信仰は、理智と感情の一致した所に起るものである、さなくば圓滿の思想とは許されぬ。

七 國家の組織は扇の如し

物平ならざれば鳴る、西洋の文明は、反抗の文明である。其の源を希臘に發してより以降、ローマ法王の專横に對しては、マルチンルーテルの宗教改革となり、神の前には、人は平等なりて自由の叫びを揚げ、或は佛國革命等となつた。今や亦各自勝手に、自己の都合を主張し、自由平等を叫び、勞働者資本家の争闘も亦頗る錯雜混亂を極めて居る。されど吾人は、今一步進んで考へねばならぬ必要がある。

抑々國家と人民とは、上下の關係でも無く、又惡平等の横の關係でもなく、常に全體と部分との關係である事を思はねばならぬ。故に民衆の多數意志が國家に表現されん事を望むデモクラチックの要求と、この部分部分を總括すべき絶對統一の要求とが

合致せねば、國家は立ち行かぬ。即ち自由平等のみ存し、或は徒らに部分のみ多くも、統一することが出来なければ、何等の價値がない。故に絶対統一の君主國にも、多數意志表現の要求に應ずる爲、立憲代議院の制が設けられ、自由平等の君主國にも統一者たる大統領の置かれて有る所以である。

譬へば、國家組織は扇の如きものである。人民は紙と骨の如く、統一者は要の如きものである。若し扇にして要が無かつたならば、扇は用をなさぬ。扇の骨一本が破損し穢れたのみでも、其の扇は最早完全なものでなく、破損せるものと見做されるが如く、扇の各部分に相當する國民は、各自各連帶責任を持てるものである。何故ならば前述の如く、君主と國民とは全體と部分との關係なるが故である。されば紙と骨とが扇全體を維持するが如く、國家は國民の奉公心と協同心とにより、維持さるゝものであらねばならぬ。奉公心と言へば自卑的な屈從的な様に思へる者あれど、決して然らず、奉公心は、連帶責任の實行的方面を指すものにて、其のデモクラチックの思想で

ある。壓迫的な上下の關係などは、少しもないことは明瞭である。(序に、主權者が專断以て下し、臨み、民衆に意志表現の自由を與へぬは、譬へば疊める扇の如し。人を撲つに便なるも、駭蕩たる春風、颯爽たる涼味を送るの用を爲さぬ。)

八 自覺と感恩と協同

以上大略述べし所により、單なる惡平等や個人主義が、最も不合理な時代後れの思想であり、奉公の精神、連帶責任觀が、合理的進歩的思想なることが判明した筈である。吾人は平生この責任觀なき利己主義者の爲に、如何に多くの損害を蒙りつゝあるか知れぬ。其の一二例を示せば、彼の汽車旅行者中には、一二の無錢乗車を企つる者あるが爲、一般公衆は乗車降車の際或は車中に於て、斯の煩はしき乗車券の検査を受けねばならぬ。又當局も之が爲、多くの人と時間とを費す。爲に社會の能率が減却さるゝ事は、莫大である。又甲が盜難に罹れりとせよ、金を盜まれたるは、甲のみならず、一般公衆が多少宛の金を奪はれたるに等しい。何となれば、甲が盜難に遭へる爲、警

察は多くの金を使つて犯人を捜索し、多くの金を費して、法廷に於て裁判し、更に多くの金を費して監獄に養ふ。是に由つて之を觀れば、個人が他に及ぼす影響の如何に大なるかの一斑を窺ふに足る。

されば吾人は國家組織の一部分たることを智的に自覺して、其の責任を重じ、更に情としては、須らく感恩の思想に生きて、國家社會の爲、奉公心、協同心を以て奉仕せねばならぬ。而して我國家を通じて、此理想を世界に實現せしめ、以つて世界人類の進歩に貢献せなければならぬ。

第六章 現時の問題と精神的教養

一 現時の問題は是れ

世界は平和の光に満ちた。しかし人心の秘奥には、一種險惡の状態が潜み來つて、何人も其の生を脅かされつゝあるを感ぜざるを得ない。皮相の平和や、不徹底の聯盟

は、決して人心を其の奥底より安め得るものではない。平和の名の下には強者の權力が潜み、聯盟の名の下には破綻が隠れて居る。まことや、ゾンバルト教授の曰うた如く、近代の二大問題は「食物の場所を得んとする問題と、食物の分配を得んとする問題」であつた。人口の増加に伴ふ食物の不足は、其の生産の場所を得んとする問題を惹起し、これが殖民政策となり、移民問題となり、進んでは侵略主義とまでなつたのであるが、幸に飽くなき獨逸の侵略主義は破壊せられて、世界の平和は克復したとは云ふものゝ、依然として此の問題は、吾等の前に遺つて食料の不足は、常に吾等を脅しつゝあると共に、今一つの問題たる食物の分配を得んとする問題は、既に久しき以前より階級戦争となつて現れ、勞せずして豊かに食物を得て居る資本階級と、額に汗して、しかも少しの食物に甘んぜざるを得ざる勞働階級との反目は、國を賭して戦うたる今回の大戦に、最も活躍したる勞働階級をして、痛切に其の不公平を感ぜざるを得ざるに至らしめて、今や勞働問題は、世界を通じての大問題となり來つたの

である。

二 物質問題と精神問題

一國の富は資本階級にあらう。しかしながら、一國の力は労働階級にある。富める者のみ多く食ひ、力あるものは飢ゑねばならぬ道理が何處にあるであらう。それも不可抗的な自然が、斯くの如くに配劑したとか、其の人身の力量によつて、此の幸運を得たといふのならば、我慢が出来るが、一方は富有の家に生れたが爲め、祖先の資産の餘惠によつて、何の力なくして唯だ富のみを有し、他方は無産階級に生れ落ちたが爲めに、終生貧苦に泣かねばならぬといふやうな人爲の社會制度に、其の源を發するもの多きに至つては、社會が何等かの設備を以て、之れが救済向上を計るのは當然の任務である。社會問題此に於て起り、社會政策此に於て行はれざるを得ないのであるが、此の問題を、單に食物の問題、制度としてのみ取扱つて居つては、永遠に解決せらるべきではない。侵略主義を未然に防ぎ世界平和の運動には、固く人道と正義と

を把つて、精神的に各國の協調を保ち、有無相通する文化的交際を理想とせざるべからざるが如く、此の社會制度の缺陷より生ずる階級争闘の問題に對しても、兩階級が交々權利を主張して、全體としての協調を忘れ、相互自己の主張を固持して、兩者相結ぶ道義的感情の之れに伴ふなくんば、如何に制度を革新しても、缺陷は其の間に生じ、飽くなき要求は、資本家の横暴に代ふるに労働者の横暴を以てし、其極、悲惨なる破壊状態を演出するの外なきは、必らずしも想像し難き事實ではない。機械と機械と相摩しては、火を發するの外はないが、其の間に油を注いで圓滑に回轉せしめ得るが如く、物質の問題にも精神問題の加はり、權利主張の問題にも義務の觀念の伴うて、初めて圓満なる解決を與へ得べきではあるまいか。

三 人心に觸れよ

精神の問題とは何ぞ、所謂人は麵麩のみにて生くるものにあらずして、唯だ食物の分配を得たるのみにて、満足するものではない。飢ゑたるものは食を求め、既に食を得

では飽かんことを求め、飽けば其の甘美を欲し、求め求めて飽くことなきは、有るに從つて多からんことを望む。資本家の奢侈贅澤に於ても見得る所であるが、これのみが人生の要求ではない。金殿玉樓、尙ほ靈の不安あり、翠帳紅閨、尙ほ涙の乾く間なし。欲樂多き所に哀情多き所以のものは、明かに人生一面の要求を示して居るものではなからうか。他が目して、因厄眞に同情に耐えずとなす労働者が、九尺二間の裏長屋に春風吹き渡りて、世の羨望する資本家が、宏壯なる邸宅に淋しき秋の風吹くは、物資以外に人の求めに已まざるものあるを語るのではなからうか。物質の満足のみを以て一切の問題を解決せんとするは、眞に人生の實情に通じ、人心の機微に觸れたものとは云ふことは出来ない。「人生意氣に感ず、功名誰れか復た論せん」これ物質的計算に於ては、如何にしても判定し能はざる人生の實情であり、人心の機微ではあるまいか。温情主義は此に於て起るのであるが、權利として主張せる労働者の要求に對し恩惠的なる資本家の温情主義によつて、能く融和することが出来るであらうか。人は

實利によつてのみ動くものではないが、又空虚なる温情によつてのみ、左右せらるべきものではない。當然の權利は、權利として認容し、社會は、此の人爲的なる不公平によつて生ずる困厄を救治し、不安を除去する方法を講じ、一面に資本家の横暴を制して、労働者との協力關係を自覺せしむると共に、他面、労働者に對しても、資本家と協力關係にあるを理解せしめ、相互に生産の一方面を擔當し、相倚り相待つて、人生の福利を増進する文化的作業に貢献する所以なることを知悉せしめ、此の理解の上に同情を起さしめて、初めて兩者の關係に圓滿なるを得るのではあるまいか。

四 義務の自覺

吾等は此點に於て、資本家の反省を促すと共に、労働者の自覺を促すに急ならざるを得ない。日本の労働者は果して自覺して居るのであらうか。同情ある先覺の士の提言によつて權利を主張すべきを知つて、直に賃銀の値上げや、労働時間の制限等に共鳴し來つたが、眞に労働者の社會的地位の向上に對して、何の自覺があるであらう。

賃銀の上げらるゝに従つて、労働能率は次第に減じ行くとは、諸方の工場に於て、しばし耳にする所、彼等の中には、毫も生活の向上を思はずして、値上げせられたる賃銀を得たるがために、安を貪つて缺勤するもの少からずといふに至つては、吾等は労働者自身のために悲まざるを得ない。吾等は世の先覺の士が、徒に彼等の権利の主張すべきことを提言するに急にして、之れに伴ふ義務の履行すべきをいふに緩なりしは、資本金横暴の現社會に對する應急策なりしを知るといへども、其の爲めに義務を閑却せしめ、所謂角を矯めて牛を殺し、我が生産能率を減縮せしむるに至つては、又思はざるの甚しきものと云はざるを得ない。吾等は権利の主張と共に、義務の自覺を痛切に感せしむる道義的觀念の發露する所あつて、こゝに労働者の人格的向上を計り得べきものなるを思ひ、こゝにも亦精神的教養の伴ふにあらずんば、一切の問題を根本的に解決し能はざるを提言せざるを得ない。

五 建設的精神

精神的教養なき所に節制なく、道義的觀念なき所に協調はない。資本家に節制なき横暴は労働者に節制なき強迫的要求を生み、前者に協調の精神なくんば、後者に互讓の態度なく、益々問題をして紛糾せしめ、危険なる思想は其の間隙に生じ來らざるを得ない。勞資互に協調し、全體の福利に着眼して、自利し他を利する互讓の精神を以て、舊來の弊を去ると共に、新しき制度を建設してこそ、新文明の光輝は放たるゝのではあるまいか。單に資本労働の問題のみならず、一般に今の日本に缺くる所のものは此の建設的精神である。一も二も破壊を快として建設を喜ばず、他の善を爲すに與みせずして、其の惡を剔抉して之を妨げんとし、飽くなきの自利を骨張して一步を譲ることを肯んせず、若し讓歩の要をいふものあれば、不徹底として一笑し去らんとす。此の如くにして如何ぞ新文化の創造に貢献し得べき。不徹底の讓歩は、もとより不可であるが、大なる理想の前には互讓も妨げず、大なる目的に對しては犠牲も辭すべからざるに拘らず、理想なく、目的なく、たゞ目前の利に汲々たるが故に、建設

的態度なく、爲めに人心の不安と險惡を誘致し來つたのではあるまいか。物質の問題には精神の問題之れに伴ひ、社會運動には文化運動の加はり、經濟問題は道德問題と關聯し、肉の救済は、靈の慰安と表裏して、初めて根本的解決を與へ得べきを思へば、吾等は現時の問題に對して、宗教家並に道德家の猛然として起たれんことを望まざるを得ない。

第七章 思想問題と生活問題

一 國民の生活

現時の思想に、若し危険なるものありとすれば、それは、我は我なりと知つて、其の我の日本人たるを忘れて居る個人主義と、我は人なりと知つて、其の日本人たるを忘れたる世界主義である。一は我といふ小さい範圍にとゞまつて、此の五尺の身體五十年の生命のこのみ考へて、町のことも國のことも考へず、たゞ自分が生きて居

る中の利益のみ計つて、山の木は伐り放第に伐るが、植ゑつけはしないといふ風であるし、他は、日本人も外國人も皆な人間だといふことを考へて、國家の利益といふことを忘れて居るのである。併し我等は、國家を離れて、唯だ我として此の世に生存が出来るであらうか、抑々亦我といふものは、今日何の爲めに生きて居るのであらう。私は此の人生の根本義から考へて見ねばならぬと思ふ。彼の我利我利主義の連中は、此の世の中に、何が一番大事かといへば、金といふであらう。併し此の世の中には、金より大事なものがないであらうか、一體人間といふものは、何の爲めに働いて居るのであらう。それは、金が欲しいからだと言はう。何故、金が欲しいのであらう。其の最少限度をいへば、金がなければ食へないからだと言ふ。何故、食はねばならぬかと云へば、食はなければ死ぬぢやないかと云ふ。食はなければ死ぬ、これは何人も疑ひのない眞理である。併し、食へば死なないであらうか。われ／＼は、毎日生きて居りたいために飯を食つて、毎日生きる方へ近くなるか、死ぬ方へ近くなるかとい

へば、云ふまでもなく、死ぬ方へ近くなるのである。それで死にたいために、食つて居るかど云へばさうではない、さうではないけれども、さうなつて行く、金より大事なのは人の命。此の命は、毎日／＼消えて行く。世には、此の命よりも、更に大切なものがないか。ある。これを義といひ、道といふ。明治十五年に軍隊に下し賜へたる勅諭の中に、「義は山岳より重く、死は鴻毛より軽しと覺悟せよ」と仰せられ、昔の志士仁人が、身を棄て家を棄て、君國の爲めに盡した所以は、此の大義大道、人の行くべき道のためである。然らば、其の道とは何ぞや、一切の哲學、一切の倫理、一切の宗教は、之れを説き、之れを究めんとするのであるが、今はそんなむづかしい道理を詮索して居る暇はない。極く解し易い所で考へて見て、此の天地間には、一つとして同じものはなく、まことに個人主義の人のいふ通り、我れは我れで、我が以外に我れはなく、他人の腹がはつても、我が腹ははらぬ、我れは我れ彼れは彼れであるが、其の本體を究むれば、我れも人、彼れも人、人たるに於ては相違はない。即ち同じ人で

あつて異なる我、異なる我であつて同じ人、同一であつて異別、異別であつて同一、此の同一であつて異別、異別であつて同一なものを持ちつ持たれつして出来て居るのが人間の世の中で、我等の此の生活といふものは、直接間接に多くの人々の力が集つて出来て居るので、如何に英雄なり、豪傑なりといつても自分一人では生きては居れぬ。食ふにつけ、着るにつけ、住むにつけ皆な多くの人の力である。既に我が現在の生活が多くの人の力であるならば、我れも亦人のため世の中のために働いて、初めて、こゝに持ちつ持たれつの共同生活が出来るのである。自分は多くの人々の世話になりながら、世の中のため人のために働かぬといふ人があるならば、それは持ちつ持たれつではない、持たれつ持たれつである。持たれつ／＼は割が善いが、持ちつ／＼は割が悪い。それも子供のやうに今は持たれつ／＼でも後には持ちつ持たれつの共同生活に入るべき準備時代ならば已むを得ぬが、身は社會の一員として立ちながら持たれつ／＼の寄生生活をやられては、爲めに持ちつ持たれつの共道生活を危害せらるゝ

事が夥しいのであるから、社会は統治の権力を持つて之を社会外に隔離して、彼等の反省を求むると共に普通人と異なれる一廓即ち監獄といふ別荘に入れて社会から其の寄生の害を遠ざけねばならぬ。社会が此の如く統治の権力を以て、其の共同生活の安寧と秩序を維持せらるゝを国家といふので、国民は其の規定せられたる法律に背かざる限りは生命、財産、自由を保障せられて、安全に共同生活を営むことが出来るので、若し此の国家なる組織の下に立たなかつたならば、我等は共同生活の恵みを受くることが出来ないであります。

二 我が国家の特色

此の国家は、渾圓球上にいろ／＼あります、我が日本の国家は、他の国家と頗る趣を異にして居るのである。我が国家の特色とする所は、いろ／＼あるが、其の結合の根本に於て、他と異なれりと申すは、血統の中心、即ち政權の中心とする所にあるのである。まことに畏れ多いことであるが、我が日本國民は上、天皇陛下の玉體

をめぐる血も、下われ／＼萬民の此の身をめぐる血も、同じ血を以て結ばれたる大和民族である。勿論日本人の種には、神別、皇別の外に蕃別と申すのがあつて、支那人朝鮮人の血も多く混じて居るのであるが、是等の人々の多く参つたのは、千有餘年の昔であつて、其の後、同一國內に居るのであるから、次第に日本人と同じ血族となつたので、其の一番正しいお方が皇室で、天照大神の神勅により天壤無窮に傳へられ、我等は其れを主上と仰ぐと共に、それを總本家として、分れに岐れて来たのである。即ち我が皇室は、政權の中心であると共に、民族の中心にましますのであるから大正御即位の詔勅にも仰せられてある通り、「義は即ち君臣にして情は父子」で、大義名分の上からいへば、君と臣とであるが、人情の上からいへば父と子との如き親みを持つてまゐつたのである。されば、我が日本の文化といふ文化も、亦皇室を中心として開發せられたので、應神天皇の朝、儒教の初めて入りました時、これを御學びになつたのは、菟道稚郎子の皇子であるし、佛教の初めて入つた時、これが興隆に力を盡

し、専心これを學ばれたのは、厩戸皇子聖德太子である。爾來歴代の皇室、儒教を以て治國平天下の道とし、佛教を以て精神教養の本とし、以て文化の開發を計られたので、其の爲めに、支那傳來の儒教も、印度傳來の佛教も、全く日本の物となつて、其の我が國風に合はざる部分は、全く除却せられた。彼の光格天皇の御製に「敷島のやまとにしきに織りてこそ、唐紅も色に榮あれ」と仰せられた如く、全然敷島のやまと錦に織りなされたのである。即ち儒教にしても、其の根本思想たる忠孝仁義を採つて、彼の所謂革命の風を却け、佛教に於ても、其の主要とする慈悲と報恩の道徳を以て、國民を教養して參つたので、此の點に於て、私は我が皇室を以て、文化開發の中心と申すばかりでなく、王朝の昔に於ては、學問といふものは、貴族階級に限られて、大學は五位以上の子弟を教育する所、國學は國司の子弟を教育する所といふ風で庶民階級には、教育が普及しなかつたのであるし、中世には、全く教育の事は頼つて文化は獨り僧侶社會の手に止り、徳川氏が文教を興隆して、武士階級にまで教育は普

及したが、猶ほ庶民階級に及ばなかつたのを、明治となつて、小學校令を定められ學問獎勵の御沙汰書となつて、邑に不學の徒なく、家に不學の人なからしめんとて、國民全般に教育を普及せしめたまふたのも、皆な皇室の御力であるのである。又知識を世界に求めよと仰せられて、日進月歩の西洋文化を輸入せしめられたのも、皇室の御力であるから、何れの點から申しても、我が皇室の文化開發の中心にましますことは疑ひない事實である。併しこれよりも、尙ほ一層我が國民の皇室に感謝いたさねばならぬのは、皇室御歴代の政治が人民を中心としたまうて、時に閥族蘇我氏の如きものが、其の中間に蟠つて、人民を苦むる場合には、之れを除却して、人民の權利を擁護して下さつたのは、何時も皇室の御力であることである。されば、三千年の久しき歴史に於て、我が國には、君と民との争ひといふものは、其の一ページをも見出すことが出来ないで、君は常に民を本とし、民は常に君を主として、中間に於ける閥族の跋扈を防ぎ來つたことである。中世、政權が武門に移つたが、其の武門は、一種の責

任内閣のやうなものであつて、上、君意に背き、下民心を失ふと、何時でも崩壊せざるを得なかつた。北條も之れが爲めに倒れ、足利もこれが爲めに亂れ、代つて國內を統一せんとする英雄は、皆な皇室の稜威によつて、民心の歸嚮を得んとしたので、織田氏は先づ禁裡修復に力を用ゐ、豊臣氏も亦之れによつて、英雄の心を収め、徳川氏の如きも、其の百ヶ條に於て「日本國知行惣高凡そ二千八百十九萬石の内、二千萬石を忠勤の大小名に配當せしめ、八百十九萬石のところ禁裡の警衛に備へて四夷を撫すべきこと」といひ、天明八年、松平定信が將軍家齊に上つた書には「古人も天下は天下の天下、一人の天下にあらずと申し候、まして六十餘州は、禁裡より御預り遊ばされ候御事に候得ば、かりそめにも、御自身の物と思召まじき御事に候」というて、將軍を戒めて居る。しかも、徳川氏の漸く民心を失ひ來るや、四方勤王の士大に起つて大義名分の思想は、終に徳川慶喜をして、「二百餘年、子孫相受け、臣其の職を奉ずといへども、政刑當を失ふこと少からず、今日の形勢に至り候も畢竟薄徳の致す所

慚懼に堪えず候。況んや當今外國の交際、日に盛なるにより、愈々朝權一途に出で申さず候ては、綱紀立ち難く候間從來の舊習を改め、政權を朝廷に歸し奉り云々」との書を上つて、政權を奉還するに至らしめたので、國內統一は常に、皇室を中心として行はれ、此の皇室によつて、人民の權利は擁護せられ、泣く子と地頭とは勝てぬといつて居つた、封建時代の陋習は打破せられて、四民平等の世となり、從來地頭、代官等に苦められた地方政治も、今は自治制を布かれて、自己の村、自己の町は其の住民によつて治め得ることとなり、國家全般としては、帝國憲法發布せられて人民に參政の權利を與へられ、帝國議會は開かれて、民意を表現せしむるやうになし下さつたのも、皆なこれ、皇室の人民を中心としたまふ思召に出たのであるから、私は民權擁護の中心としての皇室と仰ぎ奉ることを、忘れてはならぬと思ふのである。即ち我が皇室は政權の中心なるのみならず、民族の中心であり、文化開發の中心であり、民權擁護の中心にましまし、歴代の御政治は人民を中心としたまひ、我等の祖先

は皆此の皇室を中心として、君は皇化を宣べて、蒼生を撫したまひ、民は忠實公に奉じ、義は即ち君臣にして、情は父子たる、此の萬邦無比の國體を成し來つたので、決して他の國々のやうな、唯だ冷かなる權利義務の關係によつてのみ、結ばれたる國家でなく、暖き人情を以て結ばれたる國家であります。

三 現代國家の二大要求

かく申すと、そんなことを云ふのは時代遅れた、現代國家の要求は、そんなものではないといふ人があるかも知れんが、さて然らば現代國家の要求といふものは、何であらう。そは申すまでもなく、多數意志の表現であらう。しかし多數意志の表現といふことは、之れを代表し、統率するものがなければ行はれるものではありません。こゝに於て、今一つは絶対統一者の要求である。凡そ政治の形式にはいろ／＼ありますが、これを二大別すると、君主專制と民主共和である。君主專制の長所は、絶対に國民を統一して行く所にあるが、其の弊は、民情上に通せず、甚しきは毫も民意を容れぬと

いふ所にある。民主共和の政治は、民意を表現するといふ上には、非常に便利であるが、多數の人々が思ひ／＼の要求をしては、國家の統一といふことが出来るものではないから、勢ひ其の中から代表者を出して、之れと相談して政治を執るといふことにいたさねばならぬし、其の實際政治の局に當るものは、一人でなければ、統一が出来ません。亞米利加合衆國の前大統領ウィルソンは、殆ど專制君主のやうな勢を持つて、國內を統一して居たのでも明かである。即ち君主政治は、民主政治の長所を採つて民意代表の機關を設け、民主政治は又君主政治の長所を採つて、統一者を置かなければ、國政を執ることが出来ないのである。我が歴代の御政治が人民を中心としたまひ維新の宏謨には、萬機公論に決する旨を示したまひ、憲法の發布となり、帝國議會の開設となつて、民意を表現せしめたまふたのは、多數意志表現の要求を實現せられたので、これを統ぶるに絶対無競争の皇室を戴いて居るといふことは、近代國家の二大要求に應じ、しかも他の諸國の選挙や競争によつて統一者となり、勢ひ少數の反對を免

れないのとは趣を異にして居るので、これは長い歴史の積集であつて、他の國家の學ばんとして學ぶ能はざる、神聖にして侵すべからざる萬世一系の天皇によつて統治せられて居るのである。私は如何にしても、此日本に生れたことを欣幸として、我等は日本人たりといふ事を誇りさせねばならぬ。我等は、日本人たると共に現代國民の思想の中堅とならねばならぬのである。併し其の日本人は、昔の日本人ではなく、今の日本人である。世には我れは我たりといふ個人主義や、我れは人なりといふ世界主義を危険とし、我等は日本人たりとの自覺を促す人があるが、其の人々の多くは、昔の日本人たらしめんとするので、右すれ勿れ、左するなかれ、然らば何うするかといへば、神武天皇建國の昔に戻れといふのである。今更ら戻つてしまふといふことになつては、三千年に近き日月を經過して來た我等の祖先の事業は、皆無駄になつてしまふ。我等の祖先はそんな無駄なことをやつて來たのであらうか。我等は實に現代の文化を以て我等が祖先が苦心經營して置てくれた努力の結果であるのを知つて居るか

ら、此の日本を今一層立派にして、次ぎに來るべき子孫に譲り渡すのを以て、祖先の鴻恩に報じ、子孫に惠澤あらしむる人間の道であると信するから、戻つてはならぬのである。我等は進まねばならぬのである。此に於て、我等は日本人なり、然り、昔の日本人にあらず、今の日本人なり、日本の日本人にあらず、世界の日本人なりて自覺の上に立たねばならぬ。

四 共同生活と共同責任

それには何う考へて行くか、我等は日本人として國家が保障の下に共同生活を營んで居るのであるから、我等は又國民として連帶の責任があるといふ事を自覺せねばならぬ。茲に連帶の責任と申すのは、所謂ソリダリティの考へで、我等は共同生活を營んで居る以上、一人の惡は全體に影響し、一人の善も亦全體に影響して參るので、例へば私が泥棒に金を盗られたとする。これを諸君は御聽きになつても、なに加藤が金を盗られた、はあさうか位でお済しになるが、其の實私に盗られると共に、諸君も

盗られておいでになるのである。なにそんなことはない、被仰るかも知れんが、私
 が金を盗られると警察へ訴へる、そこで警察は費用を使つて、其の泥棒を捕縛して裁
 判所へ廻すと、裁判所は又費用を使つて裁判して之れを監獄へ廻すと、監獄は費用を
 使つて之れを入れて置く。此の警察費、裁判費、監獄費は泥棒が持つのか、私が持つ
 のかごいへば、さうではなくして、日本國民全體の頭へかゝるのであるから、泥棒が一
 人増せば増すほど、國民の負擔が重くなつて一人が盗まれるばかりでなく、諸君も亦
 盗まれたと同じ勘定になるのである。そこで此の全體といふことを理解して、國民各
 自が其部分々々の務めを盡す所に、其の共同生活を助け、進歩發展に貢献して行く人
 の道はあるのである。

先きにも申しした通り、人は生きて居りたいために働いて死ぬ。われ／＼は生きて居
 りたいために働くのではない。働くべきために生きて居るのである。其の働くとは何
 か。社會の共同生活を助け、其の進歩發展に貢献する人たる道を行はんがため

である。道にして行ふべくんば、車夫馬丁と雖ども、我れ喜んで之れを作す。道にし
 て行ふ能はずんば、高位高官も我れに於て何かあらんである。人は唯だ、此の社會の
 共同生活を助け、進歩發展に貢献する所に道があるのである。さかう申すと、それ
 は、さうだけれどもといふ人がある。凡そ世の中に悪い癖は、此のけれども、酒は
 飲んで悪いけれどもと來る。そこで社會の共同生活を助け、進歩發展を計るのは
 人の人たる道であらうけれども、それは、大政治家大實業家のいふことで、われ／＼
 のやうな小さな仕事をして居るものは、別に社會の共同生活を助くとか、進歩發展
 に貢献するとかいふ、大したことは出來ないといふ人が、あるかも知れぬが、それは
 自ら、自分を輕蔑して居るのであつて、凡そ人の仕事に大小貴賤の區別はない。先き
 にもいふた通り、此の世の中に同じ人はなく、其の遺傳や境遇や教育や經驗を異にし
 て、従つて其の働く方向も異なれば、其の能率も違ふ。此の違つたものが、持ちつ持
 たれつして、此の世の中は立つて行くのであるから、如何に小さな仕事といはるゝことで

も、それが社會の共同生活に干與して居るので、其の働くと働かぬとは、直に社會全體に影響して行くことは大きな仕事と異なることのないことは、丁度彼の時計の表面は、二本の針であるが、其裏には、多くの機械があつて、それが持ちつ持たれつして、うまく働いて居るので、其の中の一番小さい機械が、時計のうまく廻るのは大きな輪にこそよるけれども、吾れのやうな小さな機械はあつてもなくてもよいと、抜けてしまへば、時計の狂ふことは、大きな輪が抜けたと同じことである。既に社會の一員、國家の一民である以上は、其の一舉一動は、直に國家社會全體に影響するものである。といふことを、自覺せねばならぬ。日本を全體とすれば、我等は其の七千萬分の一であるが、全體と申すものは、部分から成り立つのであるから、一部分が缺ければ、全體に傷がつくのである。此の道理を自覺して、眞面目に熱心に自分自分の仕事を働く上に、人の道はあるのである。誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なりで、眞に徹底したる精神を以て、自分自分の仕事をするといふことが必要である。

五 徹底的精神

徹底と云ふことは「景德傳灯録」といふ書物に出て居り、兎が河を渡るのは、波の上を飛んで行くし、馬は波と底との間を泳いで行くが、象となると足を底へ徹して行く。とある。日本人は兎流か馬流か象流かと申すと、大體は兎流で上つらと、ひょん／＼と飛んで行くか、さうでなければ馬流で中途半端、胡魔化し、間に合せて、宜加減に濟して、眞に其の事に徹底してやるといふ象流の精神が乏しい。象流の精神と申すのは、全人格を其の仕事に打込んで、人を相手とせず、天を相手として、眞面目にやることである。人を相手にすると胡魔化し、中途半端をやる。人の見ない所があり、人の知らない所があつても、天は昭々靈々として我等を照して居る。よし天は知らずとも心が問はゞ何と答へる。或る俳優の申した語に、見物が少いからとて、藝を粗末にするものは、決して上手にはなれぬ、其の少い見物の中には、どんな芝居の見功者があるかも知れぬから、疎末には出来ぬと、一生懸命にやるものは、上手にはなれるが、

未だ名人にはなれぬ、眞の名人になるものは、見物が多からうが、少からうが、見功者が居らうが、居るまいが、自分の心に満足するまで、熱心にやるものでなければならぬと云ふたさうだ。之は豈に俳優の技を演ずる上のみならんやで、何事をするに就けても、此の覺悟があつて、初めて忠實業に服すと申すことが出来るのである。此の服といふ字は、衣服の服で、丁度衣服が、其の身體にしつくり合ふやうに、自分の仕事事、自分の心にしつくり合つて、こゝに眞實に忠實業に服することが出来るのである。人々が皆な此の自覺を以て、眞面目に社會の共同生活に盡して行けば、こゝに國家の健全なる發達が計られるのである。

併したゞ眞面目に熱心にと申しても、之れに伴ふ智力の働きがなければ、進歩發展が計られるものではない。由來、東洋の文化は、精神的道德的であつて、智識的物質的の方面は、遠く歐米に及ばぬのである。如何に眞面目で熱心であつても、智力がこれに伴はなかつたならば眞の文明を形造ることは出来ないのである。眞の文明は、智

識と道德との完全平均でなければならぬ。これを個人に就いて申しても、彼の男は正直だ、正直は正直だが智慧がない、馬鹿正直は役に立たぬし、彼の男は賢い、賢いことは賢いが、不道德で悪賢いのは困る。馬鹿でなくて正直、悪くなくて賢くなければならぬやうに、唯だ道德の一片に偏して、智力が之れに伴はなかつては、役に立たぬのであるから、さし／＼西洋の文化を輸入し、之れを應用して、技術の發達進歩を計り、東西兩洋の文化を融合して、新しき世界的文明を造るべき覺悟を以て、行かねばならぬのである。今や我が日本國民の生活は、昔のやうに、日本といふ島國の中に引込んで居つた時代ではなく、世界の舞臺に立つて、日進月歩の文化に順應して行かねばならぬのである。先にも申した如く、我等はたゞ社會共同生活を助けて參るばかりでなく、其の進歩發展を計らねばならぬのであるから、此の國家をして世界の優等國と肩を列べて行けるやうに進めて參らねばならぬ。それには、我等は國民的自覺以外に世界的に我が國現在の位置を自覺せねばなりません。今や日本は、世界の五大

強國の中に列したと申すが、果して彼等と伍して遜色がないであらうか。武力に於ては、漸く世界に認められて居るが、智力即ち學問や教育の方面では、まだなか／＼及びもつかぬのであるし、財力となつては戦前に於ける、或學者の計算によると、英吉利の國富は一千億萬圓、佛蘭西は一千億萬圓、亞米利加は一千五百億萬圓と申すが日本は僅に二百五十億萬圓位であるとの事である。大正四年度には日本の貿易額が十二億萬圓であつたものが、同六年には二十六億萬圓、同七年には三十六億萬圓になつたといふて喜んで居るが、これを戦前の英吉利の貿易額に比しては、五分の一位なものである。これが何うして世界列強と肩がならべられよう。

六 獨立生活の提唱

然るに、此の僅な増加によつて、早や成金の風に酔うて、奢侈贅澤の俗をなして、自分さへよければ他は何うでもよいといふ、個人的爲我的の思想に驅られて居つては此の國家の前途は如何にならう。英國では、月收五拾圓以下のものを、貧民と見做す

といふことであるが、此の標準によると、日本國民の大部分は、貧民に屬するといふ状態である。それで何の贅澤、何の奢りの沙汰でせう。生活の緊縮といふことも、亦實に目下の大問題として考へねばならぬことである。併し私は、徒に節約主義を唱へて食ふものも、食はずに働けといふやうな、無理な注文をいたすのではない。我等は、我れは我たりといふ原則を、茲に應用し、獨立生活の必要を高唱しようとするのである。先きにも申しました如く、我等の生活は、持ちつ持たれつで、如何に獨立と申しても、他の厄介にならずに、生活して行くことは出来ないものであるから、成るべく他の厄介にならぬやうに、自分の生活の資は、自分の力で得て行くといふ獨立生活を必要と申すのである。其の獨立の生活を営みますには、第一に體力を健全にして病氣等の點で、他の厄介にならぬやうにせねばならぬ。悲しいことには日本國民の體力が、年々衰へて參ることである。これでは到底世界の競争の舞臺には立てないのであるから、體力の強健といふことを、獨立生活を計るの第一義とせねばならぬ。此事

私は専門でないから略して、次に、生活の實狀に於ては、借金をして居る間は、他の厄介になつて居るのであるから、借金をせぬやうにせねば、獨立生活とは申されぬ。勿論金銭は融通すべきものであるから、低利の資金を借りて生産を計るといふことは差支のないばかりでなく、又實に必要なことであるが、自分の衣食住に使ふ金を、他より借るといふのでは、獨立とは申されませぬ此の借金をせぬといふことが、生活を安定ならしむるの本であるが、かく申すと、人には不時の事があるから、借金をせねばならぬと申すお方があるかも知れぬが、其の位不時のことがあると解つて居れば何故初めから、貯金をしないかと申さねばならぬ。それは有り餘る金なら、貯金も出来るが、餘らぬから出来ないと申す人がある。併し其の餘るとか餘らぬとか申すのは、何を標準にいふのであらう。人間の最少限度の生活といふものは、實に少額なもので、それでも必需品を得て、何うかかうか生活をいたして居るので、それが上等になればなる程贅澤費が加はつて參るので月收二十五圓位の生活の人は七割を食費、三割が

住居や衣服の費となつて居るが、月收二百圓位の人になると、食費は三割内外で、外は衣服や住宅、それも三割内外で、残る四割は交際費などに使はれるのである。其の食費といふものも、下層生活では、米代が大部分で、副食物の費用は些かで、甚しきは澤庵漬と飯だけであるが、上流になるに従つて副食物の方が増して二汁五菜だの三汁七菜の二の膳付なぞとなるのであるから、主要食物と副食物との關係は、生活の階級と反比例で、生活の上るに従つて、主要食物の費は、其の割合を少くし、贅澤な食物の方が増して行くのであり、大體の上からいふても、生活の向上に伴うて、必需費の割合は少くなるのであるから、人間の生活といふものは、切詰めればどのやうにも切り詰めらるゝるのである。勿論生活の向上に伴つて、下層生活には不用と認めらるるものが必要となつて參るものであるから、此の例を以て、一概に論ずることは出来ないが、切り詰むる餘裕は、如何なる生活にも見出し得ると思ふのである。併し私は無暗に質素儉約を高唱して、人間生活の低下を説くものではない。人間の慾望は、限

りなく、伸びて行くもので、之れを充足せんとする努力によつて、社會の發達も計られて行くのであるから、私は常に十分の努力、八分の生活といふことを申して居る。努力は十分目にして、生活を八分目にせよと申すのである、十分に十分にと努力して行くから、生活も次第に向上して参り、八分目八分目と生活をして行くから、常に餘裕を生ずるものである。

七 勤儉の氣風

十分の努力を勤といへば、八分の生活は儉である。勤儉産を治めると申すのは、即ち十分の努力八分の生活のことである。私は勤と儉とに新しい定義を下して、勤とは時間の能率を有効に發揮すること、即ち無駄に時間を費さぬこと、儉とは金銭能率を有効に發揮すること、即ち無駄に金銭を費さぬことと考へて居るのである。此の勤もなく、儉もなき人は、浮世の厄介物たる浮浪人たるを免れぬが、勤あつても、儉のないのは、浪費者たるを免れず、儉あつて勤のないものは、吝嗇漢たるを免れないの

で、健全なる生活は、勤あり儉ある十分の努力八分の生活で参らねばなりません。既に八分の生活であるから、残る二分を貯蓄して、不時の費に充て、進んでは、將來の生産資金に充つるといふ餘裕を生ずるのである。かくて生活の安定を計り、生産資金の増殖を企て、行くことが出来るのである。

八 自覺ある協力

以上は、個人としての生活に就いて云ふたのであるが、先きにも申した如く、我等は、個人として社會から孤立して暮して居るのではなく、互に持ちつ持たれつして居る共同生活であり、其の爲めに、共同の責任を持つて居るのであるから、日本を全體として考へれば、我等は其の一部分であつて、一部分のよしあしが、直に全體に關係する如く、其の一部分と一部分とは連帶の責任を持つて居るのであるから、互に相戒めて、社會全體の爲めといふことに、注目してかゝらねばならぬ。それには我等の共同生活を脅す犯罪者なぞの出ないやうに、社會全體が注意して、犯罪主要の原因た

る、貧困とか無教育とかいふことから脱離せしめて、其の原因を未發に防ぐといふ、彼此共済の實を擧げ、互に諧和して、共に此國家全體の利益を計るといふことに着眼せねばならぬ。國家は一の有機體で、まあ人間の身體のやうなものであるから、一方にのみ充血して他方が貧血しても、一方のみ發達して、他方が衰弱すしても共に健全とは申されないばかりでなく、其の爲めに發達した部分も、衰弱するに至るのであるから、此の國家全體を身體の如くに思うて、之れがために盡すのを、公共心と申すのである。此の公共のためには、目前自己の利益を犠牲に供しても、それが全體のためであり、永遠の利益であると信じた場合には、すこしも惜むことなく進むといふ覺悟があつて、國家社會の結合は、いよ／＼鞏固になり、其の進歩發達も期することが出来るのである。これが即ち、先きに申した道のために盡す所以である。道は永遠の生命であり、普遍の我である。小なる我を棄て、大なる普遍の我れに盡し、短き五十年の生命を顧みずして、永遠の生命に貢献する、此の道を自覺して、相互に力を協せ

て行つて、初めて、内は邦基を鞏くして磐石の安きを計り、外は國交を敦くして、共に平和の慶に頼ることが出来るのである。我等は、決して個人主義を排斥するものではない。たゞ其の、我れは我たりといふ小我に執して、我れは社會の一員たり、國家の一員たることを、自覺しないのを咎むるのである。我等は又決して、社會主義をも排斥するものではない。併したゞ人は人なりといふことのみを知つて、各々遺傳や境遇によつて、異なる能力を有して居るのを忘れて、社會の秩序を破壊せんとするのを攻撃するのである。それが若し、社會は個人の方にあらず、互に協力の關係によつて成り立つといふだけであるならば、我等は承認せざるを得ないのである。世界主義も亦其の通りで、現代に於ける我等の生活の基調たる國家を忘れて、單に世界といふことをのみ、力説するを危険とするのである、何れの國家も世界の文化、世界の平和といふことに着眼して、力を協せて行かねばならぬと申すのならば、我等は之れに同意せざるを得ないのである。何れの主義にも幾分の眞理はあるが、これを全分の眞理

の如く云ふ所に、危険思想は生み出さるゝのである。私は我が國民をして、個人的に自覺せしむると共に、社會的に協力せしめ、進んで國家的自覺によつて、世界の文化に協力せしめんことを願ふのであつて、自覺ある協力の六字は私が思想と生活との兩面に向つて、我が國民に力説せんとする所である。曩に内務大臣の下されました民力涵養の訓令に示されて居る所も、之れを要するに、自覺ある協力の六字に攝められると思ふのである。即ち自覺ある協力によつて、官民一致相互に國家といふことを念として、部分部分が健全なる發達を心懸け、相共に國家全體の福利を増進し、進んで世界の文化に貢献するを根本とし、公共の心を奮ひ起して、其の爲めには相互に犠牲の精神を失はぬやうにすることを必要とするのである。私は我が國民思想の中心、國家結合の樞軸たる皇室御歴代の大御心を以て、天に輝く一輪の月に喩へ奉るのであります。天に一輪の月あれば、影を萬機の器水に浮べまするが如く、御歴代の大御心をわれれ〜お互の心の水に引きうつして、月や我れ、我れや月かとわかぬまで、心も

空に溢み渡つてこそ、上下心を一にし、億兆も亦其の精神を一つにして、以て國家の健全なる發達を圖るのを、目下の急務と存じて、思想生活の兩問題に亘つて自覺ある協力を力説するのである。

第八章 實力養成の根本義

一 緒言

輕卒に見ると、内務大臣の發意である民力涵養の運動は、唯戦後の時局に對して、五個の綱領を宣傳普及するに過ぎないやうであるが、仔細に此の運動の開始せられた周囲の事情を観察し、其の綱領の中に含まれて居る所の意義を明かにし、之れが實行方法に就いて考へて見ると、將に來らんとする思想、生活の兩方面に亘つて居る新氣運に對する豫備計畫であると同時に、又現今、後から後から起つて來る種々の社會問題に對する建設的解釋であり、實行的設備である。私は初めから聊か此の運動をして

居る所から、茲に此の問題に關する私の意見を述べて見ようと思ふ。併し私一個の意見である以上、果して當局者が私と同じやうな考を持つて居るか居ないか分らないが、私は此の擧を以て官民協同の文化事業とし、舉國一致の宣傳運動とし、又實に新時代に處する社會的施設としようとする希望を持つて居るから、この論の及ぶ所の非常に廣いものにも拘らず、先づ其の根本義を明かにし、次に現代社會に對する建設的解釋を試みようと思へる。

二 先覺者の態度

私が今此の問題を論ずるに當つて、その前に先づ定めて置かなければならぬことは世の先覺者が社會を改良し、人々を教化しようとするに對して取るべき態度である。私が思ふ所に過誤がないとするならば、一切の爲政者教化者が人々を教化し、社會を改善しようとする目的は、自分自身の抱いて居る理想を實際に行つて見ようとするが爲である。今若し理想とする所を實行しようとする所に衝突もなく、自己の理想とし

て居る所のものが、直ぐに行はれるならば、其處に何等の計畫を立てる必要もないが實は實際と理想とは相伴はず。理想を直ぐ實現することは出来ないで、此の理想實際の二者を調和しようとする努力があつて、初めて百般の施設ともなり、種々の教化運動となるものであるから、先覺者がこの世に計畫を立てやうとするには、

一 自己理想の確立

二 實際状態の視察

三 理想と實際との調和方法

と云ふ三段の順序を経て來なければならぬ。若し第一の理想の確立のみを計つて、少しも實際状態の方を觀察しないならば、理想が徒に高くなつて、人民は自分のなす所のものが解らなくなり、やる事は無暗に遠い將來にでもあるやうな事で、人民は其の行ひ難きに悩むといふ具合になる。さればと云つて、唯々實際状態に囚はれて、自分には何等の理想もなく、唯實行出來れば宜いと云ふのでは、先覺者たるの責任を十